

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

**平成27年度～平成31年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」  
研究成果報告書概要**

- 1 学校法人名 関西学院      2 大学名 関西学院大学
- 3 研究組織名 応用心理科学研究センター
- 4 プロジェクト所在地 西宮市上ヶ原一番町 1-155
- 5 研究プロジェクト名 情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

## 7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
片山順一	文学研究科	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数
- 12
- 名

- 9 該当審査区分
- 理工・情報
- 生物・医歯
- 人文・社会

## 10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
片山順一	文学研究科・教授	ポジティブ情動の生理反応測定および情動評価システムの検討	研究統括、情動の心的過程の計測と解析、情動評価システムの構築
大竹恵子	文学研究科・教授	ポジティブ情動の機能に関する実験的検討および適応に関する健康心理学的アプローチ	ポジティブ情動の機能と役割の解明、心身の健康に関する予防的実践研究への応用
佐藤暢哉	文学研究科・教授	ポジティブ情動の生起と機能に関する神経細胞レベルでの検討	情動の生起に関する神経メカニズムの解明と人間の適応過程への応用
小川洋和	文学研究科・教授	情動伝播・他者理解における潜在的情報処理過程に対する実験心理学的アプローチ	ミクロレベルでの情報伝播メカニズムの解明とマクロレベルへの適用可能性の検討
桂田恵美子	文学研究科・教授	乳幼児と親との情動伝達と相互作用に関する発達臨床心理学的検討	情動に関する情報処理と適応に関する発達支援現場への応用
成田健一	文学研究科・教授	コミュニケーション過程における情動の機能と適応に関する生涯発達心理学的アプローチ	情動の伝達と適応に関する成人・高齢者コミュニケーションへの応用
中島定彦	文学研究科・教授	人と動物の情動に関する情報伝達の学習心理学的アプローチ	情動に関する情報伝達の人と動物間コミュニケーションへの応用
小野久江	文学研究科・教授	気分・情動に及ぼすストレス対処方法に関する精神医学的研究	気分・情動に及ぼすストレス対処方法の有用性に関する科学的エビデンスの臨床現場への提供
米山直樹	文学研究科・教授	教育・臨床場面での情動の役割と適応に関する臨床心理学的検討	学校や社会適応/不適応における情動の役割と教育・臨床現場への応用
(共同研究機関等) Barbara L. Fredrickson	Kenan Distinguished Professor, University of North Carolina at Chapel Hill	ポジティブ情動の機能と情動の理論の再考、および比較文化研究による検討	ポジティブ情動の理論および情動の定義と新しい枠組みに関する再考と応用可能性の検討

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

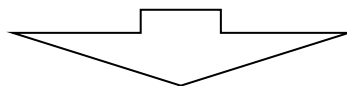
島井哲志	関西福祉科学大学・教授	健康行動やリスク認知における情動の役割に関する公衆衛生・疫学的アプローチ	健康行動の予防対策に関するポジティブ情動の役割と公衆衛生的介入や政策への応用
堀毛裕子	東北学院大学・教授	ネガティブ経験後の復元におけるポジティブ情動の役割に関する臨床健康心理学的検討	ネガティブ経験とポジティブ情動の元通り効果に関する臨床健康心理学的実践への応用

## &lt;研究者の変更状況(研究代表者を含む)&gt;

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
健康行動やリスク認知における情動の役割に関する公衆衛生・疫学的アプローチ	日本赤十字豊田看護大学・教授	島井哲志	健康行動の予防対策に関するポジティブ情動の役割と公衆衛生的介入や政策への応用

(変更の時期:平成 28 年 4 月 1 日)



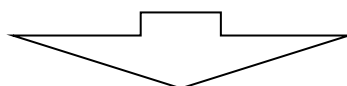
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
日本赤十字豊田看護大学・教授	関西福祉科学大学・教授	島井哲志	健康行動の予防対策に関するポジティブ情動の役割と公衆衛生的介入や政策への応用

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
ソーシャルメディアでの情報伝播メカニズムにおける情動の役割の検討	文学研究科・教授	三浦麻子	現代的コミュニケーションにおける情動の特徴的役割の解明とメディア開発への応用

(変更の時期:平成 31 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

## 11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

### (1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

#### 【 研究目的・意義 】

本研究プロジェクトの目的は、実証的な心理学の成果を積極的に社会に還元するための研究と情報を発信する拠点の形成であり、とくに未解明な点が多いポジティブ情動に着目しながら、情動の機能と社会的役割に多面的かつ階層的にアプローチし、情動概念の再構築を試みることである。

これまで、関西学院大学の心理科学研究室を母体とする応用心理科学研究センターでは、学術フロンティア推進事業「先端技術による応用心理科学研究」として理工系の先端技術を取り入れ、一方、戦略的研究基盤形成支援事業「心理学を基盤とするインタラクション評価システムの開発と応用」では心理学の知見と技術を社会へ還元するために成果をあげてきた。しかしながら、心理学が貢献しうる人間の「幸せ」に関する基礎的な実証研究の知見と情報発信は十分だとは言えない。我々人間の幸せは物質レベルだけで規定することは難しく、幸せの実現には情動の理解が必要不可欠である。

そこで本研究プロジェクトでは、神経科学を含んだ実験系心理学の基礎から臨床や社会・工学的側面も含んだ応用研究までを網羅した国際的に最先端レベルの専門家によるプロジェクトチームを構成し、最先端の学術的知見と技術を教育・臨床現場や産業界に積極的に還元し、安心で安全な社会に資するための研究・情報発信拠点を形成する。そして、幸せの追求にもつながるポジティブ情動をテーマに、情動の個人内での心的機能と社会的な役割を解明し、情動概念の再構築を試みる。本プロジェクトは、21世紀から活発化している affective science、affective neuroscience と呼ばれる広範な研究領域における心理学の新たな挑戦であり、人間の幸福に資する安心・安全な社会の形成に貢献する。

#### 【 研究計画 】

本研究プロジェクトでは、2つのサブテーマ：(1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明、(2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明、を設定している。

(1) の研究の特徴は、未解明な点が多いポジティブ情動の機能に着目し、ネガティブ情動との相互作用や文脈効果を含む心的過程や生成メカニズムを解明する点である。個人や社会が探究し続けている「幸せ」の実現には情動の理解が必要不可欠であり、その中核となるポジティブ情動はネガティブ情動に比べると細分化されておらず、情動特有の弁別特徴を持たないことなど概念や機能について未解明な部分が多い。

(2) の研究の特徴は、情報伝播における社会的な情動の役割について小集団から社会現象までマイクロマクロダイナミズムを解明する点である。人のコミュニケーション過程では情報の送受者個人や情動価を伴う社会状況や文脈の要因等が複雑に介在し、多くの処理は意識に上らない潜在過程でなされているが、これらについても未解明な点が多い。

これら (1) (2) のサブテーマについて、ヒトを対象にした情動喚起実験による生理反応の測定と認知・行動レベルへの影響、実験動物を対象にしたニューロン活動と脳内物質動態の検討に関する研究を展開し、基礎研究としての実験的アプローチから実社会への応用を目指したアプローチという意味で多面的に検討する。また階層的な検討として、個人（個体）内の機能では神経細胞のマイクロレベルから情動によって生じる個人の認知や行動といったマクロレベルまで、社会的機能では二者間での情報伝達というマイクロレベルから大集団や社会全体へと情報が伝播して社会情勢に至るといったマクロレベルまでを視野に入れる。最終的には、本プロジェクトで蓄積してきた研究成果を統合させ、最先端の学術的知見と技術を教育・臨床現場や産業界に積極的に還元し、安全・安心を超えた幸せな生活環境の創造と社会の実現に資するための研究成果を提供することを目指す。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

## (2) 研究組織

研究組織は、代表者 1 名と参加研究者 11 名（学内 8 名、学外 3 名）の計 12 名からなる。いずれも上述の目的を達成するための研究に従事するが、主に本研究プロジェクトのコアメンバーとして研究を推進し、基盤的知見を蓄積する研究を担う者が 3 名、それらの知見を踏まえて応用研究を担うものが 9 名という体制である。博士研究員 PD は 2 名（2020 年 2 月末時点；期間中 4 名）、大学院生 RA は 3 名（同；期間中 8 名）、大学院生 40 名（同；期間中 98 名）が活発に研究活動を行っている。

研究代表者はこれらを統括する立場にあり、相互の積極的連携を常に促進している。前述の通り、参加研究者たちは基礎と応用のいずれかの研究を担っている。各研究者の研究テーマに応じて、それぞれがどのような情動を扱い、その情動にどのような機能や役割があるのかを、個人レベルおよび社会レベルから検討し、基礎的知見をどのようにして応用へと発展させるかという研究役割や責任の分担を意識して研究を進めている。とくに、本研究プロジェクトのコアメンバーとして研究を推進している 3 名は、プロジェクトに参加する博士研究員 PD や大学院生 RA らとの週 1 回のミーティングを行い、互いの研究の進行状況はもちろん、最新の国内外の知見を積極的に共有するなど密に情報交換を行い、応用研究の担当者との連携も強化するよう努めている。

このほか、本研究プロジェクトに関連した情報共有のために月 1 回のペースで国内外からの有識者を招いての研究会や講演会、シンポジウム、統計を含む最新の科学的知見や技術を学ぶためのワークショップ、さらに年度末には本研究プロジェクトに関する報告会を行い、研究の活性化を促すための体制を維持している。研究支援は、文学部事務組織および研究推進社会連携機構が担当している。

## (3) 研究施設・設備等

本研究プロジェクトを実施している研究施設は、応用心理科学研究センター（使用総面積 601 m<sup>2</sup>、使用者数 18 名）、F 号館心理科学研究室（同 1168 m<sup>2</sup>、40 名）、ハミル館（同 451 m<sup>2</sup>、18 名）の 3 箇所で、事業の補助を得て整備した設備は以下の 6 件である。各件の、研究設備の名称（所在施設）およびその利用時間数と使用者数（2020 年 2 月末時点）は以下の通りである。

- A. ポジティブ感情喚起システム（応用心理科学研究センター）  
利用時間数：3580 時間、使用者数 8 名
- B. 眼球運動解析システム（応用心理科学研究センター）  
利用時間数：2550 時間、使用者数 2 名
- C. ニューロン活動記録・解析システム（応用心理科学研究センター動物実験心理学研究施設）  
利用時間数：4950 時間、使用者数 5 名
- D. 行動記録解析システム（応用心理科学研究センター）  
利用時間数：2880 時間、使用者数 8 名
- E. 眼球運動-脳波連動解析システム（応用心理科学研究センター）  
利用時間数：2040 時間、使用者数 2 名
- F. 微量生体試料分析システム（F 号館心理科学研究室）  
利用時間数：1530 時間、使用者数 2 名

## (4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び\*を付すこと。

各実験施設・システムの構築・整備を行った後、各研究プロジェクトを様々な形で展開し、順調に進捗させてきた。先にも述べたように、本研究プロジェクトでは、2つのサブテーマ：(1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明、(2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明、を設定し、研究を展開してきた。ヒトを対象にした情動喚起実験を含めて個人レベルでの認知や行動への影響を検討し、同時に実験動物を対象にしたニューロン活

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

動と脳内物質動態の検討についても行った。そして、(1) で検討してきた個人（個体）内での情動の機能に関する知見を、(2) の対人や複数の集団の中での影響へと展開しながら、情動が持つ社会的機能について検討し、最終的には、本プロジェクトで蓄積してきた研究成果を統合させ、実社会への応用につなげるべく、幼児や小学生といった対象者についても実践研究を広げ、基礎から応用まで社会貢献を目指した研究を展開してきた。

本プロジェクトでは情動の機能に焦点をあてて研究を行ってきたが、とくにポジティブ情動の喚起は個人差の影響が強いため、研究を実施する上で多くの困難と労力を要した。しかし、これまで心理科学が挑戦し続けてきた情動研究、とりわけポジティブ情動に関する実験的検討という意味では、本プロジェクトは画期的で挑戦的な研究を展開してきたとも言え、また情動概念の再構築につながる多くの成果をあげたと考えられる。最終年度に行ったシンポジウムは、日本感情心理学会のセミナー（共催）という形で実施し、本プロジェクトでの成果も含めて、あらためて情動について理論から応用展開まで幅広い観点から検討し、情動概念の再構築に関する議論を深め、それらを公表した。

以下からは、形成された研究拠点の全容について、5年間を総括して述べる。(1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明として9つの研究(a: ポジティブ情動の生理的特徴、b: 情動価を伴う刺激呈示の違いにおける評価の変化、c: 複合情動としてノスタルジアやユーモアの生理的特徴、d: ラットを用いた好奇心の神経メカニズム、e: ポジティブ情動に関連する個人の強みや主観的幸福感、f: 情動刺激に対する選択行動、g: エピソード記憶、h: 協和音・不協和音による注意捕捉、i: 認知処理における情動の役割)、(2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明として6つの研究(a: ポジティブ情動の喚起と向社会的行動との関連、b: ノスタルジア喚起時の他者への信頼性、c: 情動を伴う身体的魅力と注意、d: 幼児のポジティブ共感の発達、e: ラットにおける援助行動、f: 社会的文脈において生じる感情経験の解明)の各テーマについて進捗状況と研究成果を報告する。

## (1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明

### (1)a: ポジティブ情動の生理的特徴

「感情状態は脳と身体とのインタラクションにより生起する」と広く認められていることから、皮質活動を脳波によって、身体反応（自律神経活動）を心電図によって計測した。感情と対応する大脳皮質活動として、脳波によって計測される前頭部アルファパワー左右差が知られている (Davidson et al., 1990)。具体的には、ポジティブな感情状態では左に比べて右側の前頭部でアルファパワーが大きくなり、ネガティブな感情状態では逆のパターンを示す。ただしこの指標を用いた研究では、ある一定期間（数分程度）全体での左右差について議論されることがほとんどである。これに対して我々は、バンドパスフィルターを用いてアルファ帯域活動を抽出し、そのパワーの時系列変化を追跡する方法を確立した。また、心拍数は交感神経系・副交感神経系の支配を受け、時間に伴ってその拍数が変動することが知られている（心拍変動）。そこで感情体験下の背後にある生理状態（脳活動・自律神経系活動）の時間的な関係性を明らかにするため、前頭部アルファパワー左右差と心拍変動データについて時系列相互相関分析を行った。その結果、ポジティブ感情体験時のみにおいて、両指標が同期して変動していた。このことは、ポジティブ感情体験時には、自律神経系活動と大脳皮質活動が連動することを示し、この知見はポジティブ感情の背後にある生理学的特徴を新たに提出したものと言える。また心拍変動に続く形で前頭部アルファパワー左右差が変動しており、前頭部アルファパワー左右差は接近・回避の動機付けを反映するとも考えられていることから、両指標の同期は、自律神経系活動の影響を受け、動機付けが変化する様子を捉えた可能性もあり、この成果はポジティブ感情の背後にある生理メカニズム解明に貢献するものと言える。

### (1)b: 情動価を伴う刺激呈示の違いにおける評価の変化

ポジティブ情動に関連する刺激呈示の頻度や状況・評価の違いが反応に及ぼす影響について実験的に検討し、刺激弁別の際の刺激の抑制と要求が相対的に現れること、対象の評価がポジ

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

タイプに変化する単純接触効果が内的に生じたイメージに対しても生じること、食画像刺激の呈示によって評価が減少する感性満腹感において食物刺激に注意を向けることが重要であることを示した。

#### (1)c : 複合情動としてノスタルジアやユーモアの生理的特徴

ヒトには単一の情動だけでなく、複合的な情動も存在しているが、その1つとしてポジティブ情動が主であるノスタルジア（懐かしさ）に着目し生理的特徴について検討した結果、自律系指標のうち心拍変動における高周波成分に特徴的な変化が見られた。脳波ではこれらの変化は見られなかった。また、ノスタルジアを感じる程度（喚起量）に個人差があるかを検討した結果、抑うつ傾向の高さ、主観的幸福感の高さがノスタルジア感情の喚起量と正に関連することがわかった。この結果は、情動状態に関わる個人特性の程度がその情動の方向性に関わらず、ノスタルジア喚起の程度と関連することを示している。

#### (1)d : ラットを用いた好奇心の神経メカニズム

情動のポジティブな側面を構成している要素の1つとして、好奇心が挙げられるが、実験的操作の難しさからその機能は解明されていない。そこで、探索行動の動機に着目し、好奇心を実験的に操作可能な行動課題を開発して好奇心の機能やその神経メカニズムについて検討してきた。動物が生体内部に保持している周辺環境に関する情報と実際の周辺環境に含まれる情報に誤差があった場合に探索行動が惹起されると考えることができるため、ラットを用いて、装置内に視覚情報としてランダムウォークドットパターンを呈示し装置内部でのラットの行動を観察した。結果として、環境に含まれる情報量が大きくなるほどラットの探索行動量が増大することが示された。周辺環境の情報量を操作することによって探索行動を操作することが可能となることが示唆された。

#### (1)e ポジティブ情動に関連する個人特性と主観的幸福感

ポジティブ情動に関連した個人特性としてヒューマンストレングスと呼ばれる強みや楽観性を取りあげ、日々の個人の情動経験や感情状態、心身の健康との関連について検討した。大学生だけではなく、小学生を対象にした調査研究を実施し、日々のポジティブ情動の感じ方やポジティブな個人特性は主観的幸福感を含む心身の健康に影響することを明らかにした。また、健康において重要だとされている生活習慣のうち食行動に着目し、個人の主観的幸福感の高さが食刺激に対するポジティブ情動の喚起と関連していること、ポジティブ共感や親切が主観的幸福感に及ぼす影響についても実験的に検討した。

#### (1)f : 情動刺激に対する選択行動

報酬を予期させるポジティブな対象には接近し、嫌悪刺激を予期させるネガティブな対象からは回避することが適切な行動である。しかし、それらの価値の異なる刺激が同時に出現した場合に、どのように行動制御が変容するのかはよくわかっていない。本実験では、画面上に同時に提示した視覚刺激対からいずれか一方を選択させた。選択すると、被験者はその視覚刺激と結びついた点数を獲得した。実験結果より、報酬刺激に対する接近する際には、対となる刺激の価値に影響されにくい、嫌悪刺激に対しては回避する際には、対となる刺激の価値に依存して眼球運動の制御がなされ、出力行動やその学習過程が変容することが示唆された。これらの成果は、情動を喚起させる刺激に対する結果予測やその学習過程に関して、基礎的知見を提供した。

#### (1)g : エピソード様記憶

ヒトの RSC は、エピソード記憶に関連すると考えられている (Aggleton, 2010; Maguire, 2001; Valenstein et al., 1987)。エピソード記憶の想起のしやすさについて、経験した時点での情動状態が影響を与えることが知られている (LaBar & Cabeza, 2006)。また、RSC は情動的な刺激が提示された際に活性化する領域であり、エピソード記憶と情動との相互作用を果たしている可能性がある (Maddock, 1999)。RSC がエピソード記憶において、各要素 (i. e., いつ・

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

どこで・何を)の記憶に関連しているのかそれらの要素の統合に関連するのかわかっていない。本実験ではラットを用いRSCの損傷がエピソード様記憶に与える影響について検討した。結果として、物体の時間的順序の記憶を問うWhen課題と、エピソード様記憶を問う課題においてRSC損傷の効果が見られた。これらはRSCを損傷することで時間的な順序の記憶が阻害されることを示唆している。時間的順序の記憶が阻害されたため、各要素を統合したエピソード様記憶も阻害された可能性が考えられる。

### (1)h: 協和音・不協和音による注意捕捉

我々の周りには、心地よいピアノのメロディーや緊張感をもたらす警報音など、感情的色彩をもつ音が多く存在する。こうした感情的要素を持つ音の認知過程を知る第一歩として、協和音・不協和音に着目した。協和音・不協和音とは、複数の音の組み合わせのうち、組み合わせの相性がよいもの、悪いものを指し、ヒトは協和音にポジティブな印象を、不協和音にネガティブな印象を抱きやすいことが知られている。感情的要素をもつ和音が、どのように我々の注意を捕捉するのかについて、脳波実験を行った。用いた実験パラダイムは、ターゲット音・標準音・課題非関連音の3つの音カテゴリを呈示する3音オッドボール課題であり、課題非関連音として協和音・不協和音を呈示した。この課題中の課題非関連音はP3aと呼ばれる事象関連脳電位(ERP)成分を惹起することが知られている(Katayama & Polich, 1998)。そしてこの成分の振幅は、その課題非関連音がどの程度注意を捕捉したかの指標となる(Sawaki & Katayama, 2007; 2008)。上記の目的に加え、和音による注意捕捉の程度は注意資源の配分によって異なるのかどうか、さらにこれまでの音楽経験の有無はその程度に及ぼすのかを調べることにした。そのために主課題の難度を操作し、また音楽経験の長さによって群分けした。結果、課題非関連音(和音)が惹起したP3aは、主課題が高難度のときのみにおいて、協和音に対する振幅が不協和音に対するそれよりも大きくなった。このことは、主課題の難度による注意資源配分の変化は協和音・不協和音による注意捕捉の程度に影響を及ぼし、かつ、注意資源が十分でない時のみに協和音の方が不協和音よりも注意を捕捉することを示唆する。またその注意捕捉の程度には音楽経験の効果が見られず、このことは協和音・不協和音による注意捕捉のプロセスが生得的なメカニズムに基づいている可能性を示唆する。

### (1)i: 認知処理における情動の役割

感情(affect)は認知処理に影響を及ぼすことが報告されており、文処理もその例外ではない。具体的には、意味逸脱文に対するN400(Chwilla et al., 2011)、統語逸脱文に対するP600(Verhees et al., 2015)は、快感情時の方が不快感情時にくらべ頭皮上の広範囲で確認され、それらの振幅も大きい。しかしながら、これらの研究では中性感情時の文処理との比較を行っていないため、快感情が認知的処理を促進したのか、不快感情がそれを抑制したのか、またはその両者であるのかは不明確のままである。そこで快・不快感情に中性感情を加え、これらが文処理に及ぼす影響を検討した。

## (2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明

### (2)a: ポジティブ情動の喚起と向社会的行動との関連

ポジティブ情動の社会的機能のひとつとして、様々な資源の拡張が指摘されており、なかでも向社会的行動への影響が注目されている。向社会的行動の生起には様々な要因が関連することが明らかにされているが、ポジティブ情動の中でも感謝と平穏という覚醒度の異なる状態をとりあげて情動喚起実験を行い、援助要請場面に対する援助行動意図への影響について検討した。想像課題は、文章呈示やイラスト呈示など様々な手法を開発しながら実験を試み、行動意図への影響の検討においても、親切に関する個人特性や共感性、動機づけ、さらには負債感や後悔といった援助行動の促進に関連する可能性があるネガティブ情動の影響についても考慮しながら検討を行った。その結果、ポジティブ情動の喚起によって、他者に対する思考行動レパートリーが増加すること、情動喚起を伴う想像課題を行うことによって援助意図が高まることが明らかにされた。また、小学生を対象に行った実験的研究からは、情動喚起によって他者に

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

対して公平な分配を行う可能性が示唆され、これらの結果は、ポジティブ情動の社会的機能を示す興味深い知見だと考えられる。

#### (2)b : ノスタルジア喚起時の他者への信頼性

ノスタルジアというポジティブ情動を含む複合的な情動状態によって他者の信頼性評価が向上するかどうかという点に焦点を当て、その認知的特徴も調べたところ、ノスタルジア状態を喚起することで他者顔の信頼性を高く知覚することが明らかになった。このことは、ノスタルジア状態が顔知覚に対しても影響を与えることを初めて示している。

#### (2)c : 情動を伴う身体的魅力と注意

ポジティブ情動を引き起こす1つの要因として身体的魅力に着目し、身体的魅力にどのぐらいの速さで注意が惹きつけられるのか(時間的特徴)、身体部位のどこに注意が惹きつけられるのか(空間的特徴)という2点について注意の有用な指標である事象関連脳電位(ERP)を用いて検討した。その結果、刺激呈示後200-250msで身体的魅力の高い異性に注意が惹きつけられること、そして、この注意の捕捉は刺激の物理特性(コントラストや輝度)や刺激呈示方法の影響を受けないことが示された。

#### (2)d : 幼児のポジティブ共感の発達

幼児期における共感発達過程について検討を行ってきた。1歳と2歳の子どもに焦点を当て、複数の状況における他者(母親と実験者)のネガティブ情動を示す演技の目撃を通して子どもの共感的反応に相手の情動の手がかりの明確さが与える影響を検討した。また、複数のポジティブ状況における他者への子どもの反応の観察から、他者の達成に対するポジティブ共感が年齢とともに発達することを示した。さらに2歳児を対象に、課題達成時の被称賛経験が他者の達成への共感に与える影響についても、様々な課題を用いて実験的に検討し、一連の研究から、女兒は母親の達成時に男児よりも情動的に共感しやすいことや、日常的に達成を多く経験している子どもは、母親の達成時に共感しやすいことが明らかになった。

#### (2)e : ラットにおける援助行動

喜びや恐怖、不安などの情動的反応を呈している他者を観察するとき、観察者は自身が直接経験していないにも関わらず、その他者と同様の情動的反応が惹起され。他者がどのような情動状態にあるのかを把握することができる。このような能力は共感(empathy)と呼ばれている。オキシトシンは社会行動の調整に関わる神経伝達物質であることから、共感において重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、社会行動におけるオキシトシンの作用が多岐に渡ることから、共感におけるオキシトシンの働きやその神経基盤については十分な理解が得られていない。一方、他者へ利益をもたらす向社会的行動(prosocial behavior)は共感により動機づけられると考えられており、これまでヒトやヒト以外の霊長類を対象とした研究が盛んにおこなわれてきた。特に近年では、ラットが困難な状況に陥った他個体をその状況から助け出すという援助行動をおこなうことが報告されている。このラットの援助行動は共感によって動機づけられることが示唆されることから、共感の神経基盤を解明するための有力なツールとして着目されている。そこで、共感におけるオキシトシンの働きやその神経基盤について明らかにするために、ラットの援助行動におけるオキシトシンの機能を検討した。

#### (2)f : 社会的文脈において生じる感情経験の解明

ある行為の結果に対する報酬予測誤差の算出は脳内で素早く行われており、その後の高次な感情経験を導く重要な過程の一つと考えられる。社会的文脈下で生じる複雑な感情経験の理解を促進するため、ヒト複数名で課題を遂行している際の脳波を同時記録する研究を遂行中である。連続する脳波から行為結果を観察した際の事象関連脳電位を算出し、報酬予測誤差の大きさを調べている。進捗として、集団成員全員が同時に成功あるいは失敗した際に算出される報酬予測誤差がその他の状況で算出されるそれと比較して大きいという現象を観測しており、現在その機序を解明するための研究を進めている。



法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

### <優れた成果があがった点>

前項で具体的に挙げた通り、基礎から応用に至る幅広い新規な知見が多く得られ、論文等も含めて業績として結実した。以下では、本プロジェクトで得られた諸知見の学術的優位性について、それぞれの研究の成果と社会的文脈における意義について述べる。

#### (1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明

##### (1)a : ポジティブ情動の生理的特徴

ポジティブ・ネガティブな感情を体験している間の脳波と心拍数を同時計測し、また各指標の時系列変化を追跡する方法を確立した。またこの方法を用いて、感情体験の背後にある大脳皮質活動・自律神経系活動の関係性を調べた。結果、ポジティブ感情体験時においてのみ、大脳皮質活動と自律神経系活動の同期が見られた。この成果は、ポジティブ感情の生理学的特徴について新たな知見を提出するものであり、また、ポジティブ感情発生の生理学的メカニズム解明に貢献する重要なものである。これらの知見はすでに国内誌として公表されている。(成果\* 9, 23, 59)

##### (1)b : 情動価を伴う刺激呈示の違いにおける評価の変化

情動価を含む刺激を繰り返し呈示したり抑制することによって反応の違いがみられるかを実験的に検討し、刺激弁別の際の刺激の抑制と要求が相対的に現れ、対象の評価がポジティブに変化するには、対象にさらされた状況と評価の状況が一貫していることが重要であることを明らかにした。また、感性満腹感の現象生起には食物刺激に注意を向けることが重要であることも見出した。これらの知見は、認知心理学や健康心理学領域において特筆すべき知見であり、その成果はすでに国際誌および英文論文として公表されている。応用研究への展開の可能性も含めて有益な知見だと高く評価できる。(成果\* 3, 4, 5, 6)

##### (1)c : 複合情動としてノスタルジアやユーモアの生理的特徴

ポジティブ情動の特徴を明らかにする上では、ネガティブ情動との相互作用や複合情動状態での機能の解明はヒトの複雑な情動反応を理解する上では重要であるが、これまでノスタルジアが持つ特徴は不明であった。そのような中で、本研究はノスタルジア状態の生理的特徴や個人差を初めて明らかにしたという点において特筆すべき成果だといえる。これらの研究知見は、日本心理学会第 81 回大会優秀発表賞を受賞し、現在、一部を学会誌論文として投稿中である。(成果\* 8, 31, 34, 37, 48, 54)

##### (1)d : ラットを用いた好奇心の神経メカニズム

好奇心は行動の動機づけにおいて重要な役割を担うと考えられるが、実験場面において好奇心を惹起させることが困難であるため、その機能やメカニズムについては実験的検討が十分になされていない。この点について、探索行動が好奇心を反映する行動であることに着目した。探索行動の神経機序を検討することは、好奇心に対する新たな知見を提供する上で重要である。視覚刺激を用いてラットの探索行動を惹起させることが可能な行動課題を作成した点は重要であると言える。(成果\* 10, 43, 44, 68)

##### (1)e : ポジティブ情動に関連する個人の強みや主観的幸福感

児童を対象にした強み尺度の開発はわが国では初の成果であること、ポジティブ共感 は直接的に主観的幸福感を高めるだけでなく親切の動機や認識を介して主観的幸福感を高めることが示された。また主観的幸福感の高い人は、食刺激をはじめ日常場面でポジティブ情動が喚起されやすい可能性が示唆され、この成果は国際誌論文として掲載され、応用に発展できる興味深い知見だと評価できる。(成果\* 2, 26, 36, 38, 42, 52, 58, 66)

##### (1)f : 情動刺激に対する選択行動

対となった刺激から一方を選択する場面においては、報酬刺激に接近するか、嫌悪刺激から回避するかによって、対となる刺激の価値から受ける影響が異なることを明らかにした。これらは情動に関する結果の予測や反応の違いにおける興味深い知見と考えられる。(成果\* 67)

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

**(1)g : エピソード様記憶**

エピソード様記憶の神経基盤の解明の一端を担った研究である。(成果\* 10, 43)

**(1)h : 協和音・不協和音による注意捕捉**

協和音・不協和音は快・不快な印象を我々に与える。これらの和音がどのように我々の注意を捕捉するかについて、3 刺激オドボール課題中の事象関連電位を計測した。結果、課題難度が高く注意資源が十分でないとき、協和音が不協和音よりも強く注意を捕捉することがわかった。これらの成果はすでに国内、国際学会にて報告済みであり、現在は国際誌に投稿準備中である。(成果\* 64, 69)

**(1)i : 認知処理における情動の役割**

参加者の感情状態を操作するために快・不快・中性感情を誘発する動画のいずれかを視聴させ、その前後で脳波を計測しながら文章判断課題を実施させた。その結果、快・中性動画を視聴した参加者は、動画視聴前後の文章判断課題で意味逸脱文と正文に対する N400 の有意な差が認められたのに対し、不快動画を視聴した参加者では、動画視聴前でしか意味逸脱文と正文に対する N400 の有意な差は認められなかった。このことから、快感情が文処理を促進しているわけではなく、不快感情が文処理を抑制しており、感情と認知処理は不可分であると結論づけられた。(成果\* 12, 24, 49)

**(2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明****(2)a : ポジティブ情動の喚起と向社会的行動との関連**

感謝感情をとりあげて向社会的行動との関連について実験的に検討した結果、ポジティブ情動によって他者への援助意図が高まり、介入から 1 週間後の行動を検討した実験からは実際の向社会的行動が増えていたことを見出した。この結果は、思考だけではなく、実際の行動への影響を示唆する貴重なデータであり、ポジティブ情動が持つ社会的機能のひとつの側面の解明につながる知見だと考えられる。また、ポジティブ情動の喚起を含む、想像課題の開発とくにイラスト呈示課題の開発は、従来の文章呈示刺激とは異なった知見が示されていることから、言語習得を持たない年齢層や対象者特性でも実施できる可能性を広げるため、今後の活用と実験展開が期待される。これらの研究知見は、現在国内外の学術論文として投稿準備中である。(成果\* 39, 42, 51, 52)

**(2)b : ノスタルジア喚起時の他者への信頼性**

ノスタルジア状態における生理的特徴の解明に関する研究知見に加えて、ノスタルジア状態によって他者の顔評価が変容することを発見した。ノスタルジア状態が持つ機能の背景には、これらの生理的・認知的な変化があることを初めて示しており、応用研究にも発展できる可能性を含む興味深い成果だと言える。これらの研究知見は、現在国際誌論文として投稿準備中である。(成果\* 41, 53)

**(2)c : 情動を伴う身体的魅力と注意**

ある刺激が観察者の注意を惹きつけない状況を作り出しても身体的魅力が高い異性は観察者の注意を素早く惹きつけること、すなわち、いかなる時も身体的魅力を無視することが困難であることを見出した。このことはポジティブ情動が持つ注意に関する重要な機能の 1 つを示していると考えられる。これらの研究知見は、現在国際誌論文として投稿準備中である。(成果\* 18, 19, 28, 29, 30, 32, 35, 46, 56, 62)

**(2)d : 幼児のポジティブ共感の発達**

これまでの研究では、他者のネガティブ情動に対する共感からモデル検証も行われてきたが、共感喚起状況に関する検討は不十分であった。ポジティブ情動を示す他者に対する子どもの反応を観察したことも新たな試みであり、学術的な意義が高いと言える。とくに、自他分離の機能は、ポジティブ情動に対する共感には当てはまらない可能性が示唆され、ポジティブ共感独自の発達メカニズムを持つことが考えられる。これらの知見は、すでに学会誌論文として公開されている。(成果\* 7, 14, 16, 17, 20, 21, 22, 27, 33, 47, 63)

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

### (2)e: ラットにおける援助行動

オキシトシンを末梢投与することによって、親しい他個体または見知らぬ他個体を助けるときの援助行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、オキシトシンの投与を受けたラットにおいて、親しい他個体に対するよりも見知らぬ他個体に対する援助行動が早く獲得されることが示された。この結果は、援助行動におけるオキシトシンの作用が社会的文脈に依存していることを示唆している。(成果\* 1, 11, 15, 25, 40, 45, 50, 57, 60)

### (2)f: 社会的文脈において生じる感情経験の解明

報酬予測誤差を反映すると考えられている事象関連脳電位は集団成員全員が成功あるいは失敗した際に大きかった。この現象は成員間に協力関係がある時にのみ観察され、他者の反応をコンピューターに生成させた時や他者との協力関係を排した時には観察されなかった。これらの実験結果は、他者と協力関係がある状況では報酬予測誤差の算出が他者の行為結果にまで及び、自己の行為結果に対する報酬予測誤差と統合されて算出される可能性を示している。(成果\* 13, 55, 61, 65, 70)

### <課題となった点>

ここまで述べてきたように、本プロジェクトは当初の計画通り以上に順当に推移し、特筆すべき問題点はない。しかし強いて課題となった点を述べるとすれば、情動を扱うことの難しさを指摘することができる。このことは、本プロジェクトにおける課題という意味だけではなく、心理学全体における課題でもあり、とりわけポジティブ情動を扱うことで研究を展開するうえで今後も検討し続ける必要がある点だといえる。ポジティブ感情を扱うことの難しさについては従来からも指摘されており、例えば、ネガティブ感情に比べてポジティブ感情は、実験的喚起が困難であること、個々の感情が細分化されておらず弁別可能な特徴を持たないため概念定義が難しいこと、生体の保護など緊急の必要性が考えにくいため感情の機能が明確でないことなどがあげられる。本プロジェクトでは、ポジティブ情動に焦点を当て、様々なアプローチを駆使しながら実験を行った。とくにポジティブ情動の喚起には個人差の影響を強く受けるため、喚起手法の確立において多くの困難と労力を要したが、これまで心理学が挑戦し続けてきた情動研究、とりわけポジティブ情動に関する実験的検討という意味では、情動概念の再構築を目指した大きな課題に挑み、多くの成果をあげたと考えることができる。

今後は、ポジティブ情動の機能や生起に関する詳細なメカニズムを神経活動と併せて解明し、個人の行動への影響だけではなく、他者あるいは社会全体との関わりという大きな枠組みから現象理解を目指すことが課題だといえる。そして、ポジティブ情動が果たす役割に関する知見を、実社会への応用として展開し、安全・安心な社会や幸せな生活環境の創造、さらに健康支援、健康長寿社会の実現、社会全体のウェルビーイング向上へとつなげていくことが今後さらに期待される。

### <自己評価の実施結果と対応状況>

学内評価体制として、関西学院大学研究推進社会連携機構内に私立大学戦略的基盤形成支援事業の評価委員会が設置されており、事業3年目である平成29年度に中間評価を受けた(別紙1)。事業5年目である令和元年度においても、令和2年3月末までに事後評価を受ける予定である(別紙2)。

### <外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

学外評価として、事業3年目である平成29年度に他大学の研究者2名(国立大学および私立大学)による中間評価を受けた(別紙3)。事業5年目である令和元年度においても、令和2年3月末までに他大学に所属する研究者2名(国立大学および私立大学)による事後評価を受ける予定である(別紙4)。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

### ＜研究期間終了後の展望＞

いずれの研究についても、本研究プロジェクトにより整備された基盤、すなわち、研究施設・装置・設備をよりいっそう活用することによって、各研究の継続と発展さらには人材の育成をはかることが期待されよう。しかし、残念ながら現時点において、せっかく整備された基盤を維持させる制度はなく、ここまで維持してきた研究体制を今後も継続して運用するための支援を強く要望する。

### ＜研究成果の副次的効果＞

本プロジェクトは実証的心理科学の研究成果を広く社会へ発信することを目指して展開してきたが、とくに産業界との連携として、研究代表者の片山順一は、プロジェクト期間中に民間企業6社との学外共同研究を行っており、産業界との連携による研究成果の積極的な還元を努めてきた。さらに犯罪の科学捜査への還元として、2019年12月18日に博士研究員の Robin Orthey が学部生3名と共に奈良県警察本部科学捜査研究所を訪問し、心理生理学技術の犯罪捜査への応用について意見交換を行った。

また、研究者養成について、本プロジェクトの中心的な目的ではないと位置づけているが、本研究の副次的効果として、大学院生等への研究教育活動において大きな支援となったことがあげられる。月に1回のペースで通算40回開催してきた研究会、最新の統計を含む研究手法を実際に学ぶ形式で開催したワークショップ、講演会、シンポジウム等の企画と実施は、大学院生等に対して学際的で専門的な知的好奇心を刺激する機会を提供することにつながり、本学の大学院生の研究の活性化と研究業績の向上に大きく貢献した。その成果として、本プロジェクトの期間中、計15名の博士学位取得者、計39名の修士学位取得者を送り出すことにつながったと考えている。また、本プロジェクトで採用した博士研究員のうち1名は、2019年に国立大学の准教授として着任し、別の1名は、現在、日本学術振興会特別研究員(PD)となり、本学にて研究を継続展開している。さらに、2019年度には、国外からの博士研究員を1名採用している。以上の点から、本プロジェクトは研究者養成という点における副次的効果をもたらしたと考えられる。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 情動メカニズム (2) ポジティブ情動 (3) ネガティブ情動  
 (4) コミュニケーション過程 (5) 生理反応 (6) 神経生理  
 (7) 幸せ (8) 心理科学

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには\*を付すこと。

### ＜雑誌論文＞

- \*1 Sato, N., Tan, L., Tate, K., & Okada, M. (2015). Rats demonstrate helping behavior toward a soaked conspecific. *Animal cognition*, 18, 1039-1047.
- 三浦麻子・小森政嗣・松村真宏・前田和甫 (2015). 東日本大震災時のネガティブ感情反応表出—大規模データによる検討— *心理学研究*, 86, 102-111.
- 成田健一 (2015). 高齢者のパーソナリティ *老年精神医学雑誌*, 26, 1405-1416.
- 杉原聡子・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症児の運筆 訓練時における親の指導行動に対するビデオ・フィードバック *行動分析学研究*, 30, 13-23.
- Kimura, T., & Katayama, J. (2015). Approach of visual stimuli modulates spatial expectations for subsequent somatosensory stimuli. *International Journal of*

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- Psychophysiology*, 96 (3), 176-182.
6. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定—実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討— パーソナリティ研究, 25, 151-153.
  7. 佐藤暢哉 (2016). 共感性研究に齧歯類を対象とすることの意義—神前・渡辺論文へのコメント— 心理学評論, 58, 295-298.
  8. 鈴木麻希・永井成美・大竹恵子 (2016). HAQ-C で評価した小学生の攻撃性と心臓自律神経活動、食生活、運動習慣の関連—子どもと心のからだ日本小児心身医学会雑誌, 25, 202-211.
  9. 大森駿哉・片山順一 (2016). 行動・生理指標を用いたポジティブ感情の機能や状態の解明 : 拡張—形成理論とフローを中心として— 人文論究 (関西学院大学文学部), 66, 51-68.
  10. Nakajima, S. (2016). Running induces nausea in rats: Kaolin intake generated by voluntary and forced wheel running. *Appetite*, 106, 85-94.
  11. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定尺度の開発—妥当性に関する多側面からの検討— 感情心理学研究, 23, 78-86.
  12. 金喬・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症幼児に対する課題分析を用いた着替え指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 13-18.
  13. 西川若菜・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する PECS を用いた要求行動の形成—エラー修正法の変更を加えた指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 7-12.
  14. 里見香奈・成田健一 (2016). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析—わが国の学会誌に掲載された実証論文のタイトル分析 : 1980年-2013年— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 25-32.
  15. 田宮めぐみ・米山直樹・松見淳子 (2016). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 19-24.
  16. Kimura, K., & Katayama, J. (2016). Cooperative context is a determinant of the social influence on outcome evaluation: An electrophysiological study. *International Journal of Psychophysiology*, 100, 28-35.
  17. 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2016). ラットの扁桃体基底外側核損傷が強化子の価値低減効果に及ぼす影響— 人文論究 (関西学院大学文学部), 65 (4), 63-74.
  18. 松永昌宏・小林章雄・柴田英治・大竹恵子・大平英樹 (2016). 幸福感を高める心理学的介入による心身の健康の増進— *Medical Science Digest*, 42(1), 2-5.
  19. 里見香奈・成田健一 (2016). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析—わが国の学会誌に掲載された実証論文のタイトル分析 : 1980年-2013年— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 25-32.
  20. 山本亜実・大城未緒・南由歩・竹谷怜子・小野久江 (2016). 乗馬初心者に対する乗馬体験の心理的・生理的影響— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 1-5.
  21. 金喬・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症幼児に対する課題分析を用いた着替え指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 13-18.
  22. 西川若菜・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する PECS を用いた要求行動の形成—エラー修正法の変更を加えた指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 7-12.
  23. 田宮めぐみ・米山直樹・松見淳子 (2016). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 19-24.
  24. 伏田幸平・片山順一 (2016). 身体的魅力に対する注意の時間的推移— 人文論究 (関西学院大学文学部紀要), 66(3), 25-45.
  25. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). Regularity of approaching visual stimuli influences spatial expectations for subsequent somatosensory stimuli. *Experimental Brain Research*.
  26. \*2 小國龍治・大竹恵子 (2017). 児童用強み認識尺度と児童用強み活用感尺度の作成及び,

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究.

27. \*3 Otake, K., & Kato, K. (2017). Subjective happiness and emotional responsiveness to food stimuli. *Journal of Happiness Studies*.
28. 杉原聡子・米山直樹 (2017). 目標行動選定用シートを用いた短縮版ペアレント・トレーニングの試み 人文論究, 67.
29. 文瑞穂・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対する構造化を用いた介入 —音楽の模擬授業場面を対象に— 関西学院大学心理科学研究, 43, 33-39.
30. 荒岡茉弥・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対する宣言言語・要求言語の自発の促進に関する研究. 関西学院大学心理科学研究, 43, 41-48.
31. 登日温子・成田健一 (2017). 上手なあきらめができる人—社会的認知学習理論からあきらめ現象を捉える— 関西学院大学心理科学研究, 43, 75-84.
32. 箕浦有希久・成田健一 (2017). 自尊感情の複数回測定とその展望—測定方法と研究目的に注目して— 関西学院大学心理科学研究, 43, 1-18.
33. 辻道英里奈・植田瑞穂・桂田恵美子 (2017). 大学生の向社会的行動および共感性と親子関係との関連 関西学院大学心理科学研究, 43, 29-54.
34. \*4 Inoue, K., & Sato, N. (2017). Valuation of go stimuli or devaluation of no-go stimuli? Evidence of an increased preference for attended go stimuli following a go/no-go task. *Frontiers in Psychology*, 8, 474.
35. Yamamoto, A., Tsujimoto, E., Taketani, R., Tsujii, N., Shirakawa, O., & Ono, H. (2018). The Effect of Interpersonal Counseling for Subthreshold Depression in Undergraduates: An Exploratory Randomized Controlled Trial. *Depression Research and Treatment*, 2018, 1-6.
36. Nakajima, S., Ogai, T., & Sasaki, A. (2018). Relapse of conditioned taste aversion in rats exposed to constant and graded extinction treatments. *Learning and Motivation*, 63, 11-19.
37. Nakajima, S. (2018). Clay eating attenuates lithium-based taste aversion learning in rats: A remedial effect of kaolin on nausea. *Physiology & Behavior*, 188, 199-204.
38. Sato, N., Fujishita, C., & Yamagishi, A. (2018). To take or not to take the shortcut: Flexible spatial behaviour of rats based on cognitive map in a lattice maze. *Behavioural Processes*, 151, 39-43.
39. 椎木泰華・松原由布子・川西舞・米山直樹 (2018). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対するトークン・エコノミー法の回顧的研究—従事行動または正反応に対応させて— 関西学院大学心理科学研究, 44, 37-42.
40. 渡邊佳奈・米山直樹 (2018). 自閉スペクトラム症児を対象とした遊びにおける交互交代行動の獲得に向けた刺激性制御の検討 関西学院大学心理科学研究, 44, 23-29.
41. \*5 Inoue, K., Yagi, Y., & Sato, N. (2018). The mere exposure effect for visual image. *Memory & Cognition*, 46, 181-190.
42. 中島定彦・遠座奈々子 (2017). 不安症状の再発—パヴロフ型条件づけの基礎研究と理論から— 基礎心理学研究, 35, 163-177.
43. Ono, H., Yamamoto, K., Taketani, R., Tsujimoto, E. (2017). Use of interpersonal counseling for modern type depression. *A Case Report in Psychiatry*, Article ID 9491348, 5 pages.
44. \*6 Inoue, K., Otake, K., & Sato, N. (2018). Satiety change elicited by repeated exposure to the visual appearance of food: Importance of attention and simulating eating action. *Journal of Health Psychology Research*.
45. \*7 Katsurada, E., Tanimukai, M., Akazawa, J. (2017). A study of associations among

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- attachment patterns, maltreatment, and behavior problem in institutionalized children in Japan, *Child Abuse & Neglect*, 70, 274-282.
46. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). Visual stimuli approaching toward the body influence temporal expectations about subsequent somatosensory stimuli. *Brain Research*, 1664, 95-101.
  47. Kimura, T., & Katayama, J. (2018). The approach of visual stimuli influences expectations about stimulus types for subsequent somatosensory stimuli. *Experimental Brain Research*, 236, 1563-1571.
  48. 武藤麻美・桂田恵美子 (2018). 多様な家族形態の児童に対する社会的距離—個人の帰属複雑性と性役割態度との関連に焦点を当てて— 家族心理学研究, 32, 1-13.
  49. Kimura, K., Sawada, H., & Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study. *Neuropsychologia*, 119, 271-279.
  50. \*8 小林正法・大竹恵子 (2018). 主観的幸福感と抑うつ傾向がノスタルジア状態の喚起に与える影響 : 音楽によるノスタルジア状態の喚起を用いて パーソナリティ研究 Advance online publication. <https://doi.org/10.2132/personality.27.2.6>
  51. Nakajima, S. (2018). Running-based pica and taste avoidance in rats. *Learning & Behavior*, 46, 182-197.
  52. 遠座奈々子・中島定彦 (2018). 不安障害に対するエクスポージャー法と系統的脱感作法—基礎研究と臨床実践の交流再開に向けて— 基礎心理学研究, 36, 243-252.
  53. Nakajima, S. (2018). Effect of water temperature on swimming-based taste aversion learning in rats. *Learning and Motivation*, 63, 91-97.
  54. 中島定彦・安藤拓也・徳力洋介 (2018). 択一式筆記試験における正答の位置 関西学院大学心理科学研究, 44, 9-15.
  55. Nakajima, S. (2018). Extinction of running-based taste aversion in rats (*Rattus norvegicus*). *International Journal of Comparative Psychology*, 31.
  56. 仲早苗・片山順一 (2018). 課題無関連情報による注意捕捉 人文論究 (関西学院大学文学部), 67, 27-44.
  57. Katsurada, E. (2019). A pilot study on the effect of massage on stress among female Japanese university students. *Women's Health, Open Journal*, 5, 1-5.
  58. \*9 真田原行・小林正法・大竹恵子・片山順一 (2019). 感情喚起下における生理状態の時系列相互相関—前頭脳波  $\alpha$  パワー——左右差と心拍数を指標として—— 感情心理学研究, 26, 62-70.
  59. \*10 Hayashi, T., Oguro, M., & Sato, N. (in press). Involvement of the retrosplenial cortex in the processing of the temporal aspect of episodic-like memory in rats. *Neuroscience Research*.
  60. \*11 Yamagishi, A., Okada, M., Masuda, M., & Sato, N. (in press). Oxytocin administration modulates rats' helping behavior depending on social context. *Neuroscience Research*.
  61. 岩城夢由菜・米山直樹 (2019). ダウン症児に対するスプーン使用の指導における視覚的手がかりとフェイディングの有効性 関西学院大学心理科学研究, 45, 1-8.
  62. 趙アルム・米山直樹 (2019). ダウン症児における同一見本合わせを用いた色概念の形成 関西学院大学心理科学研究, 45, 19-24.
  63. 名取咲希・荒岡茉弥・米山直樹 (2019). 自閉スペクトラム症児における大小弁別の獲得を目的とした大小のひらがなカードによるネーミングの効果 関西学院大学心理科学研究, 45, 25-30.
  64. 山岸厚仁・中島定彦・廣野翔太・三島美緑・木本琢海・記田浩明・鹿瀬大稀・松藤未宇・酒井太郎・賈擎宇・橋本侑希美・水江春美・大久保綾香・北野孝太・佐藤暢哉 (2019). ラットの条件性抑制における阻止効果の再現 関西学院大学心理科学研究, 45, 9-18.
  65. 小野塚愛・桂田恵美子 (2019). 大学生の愛着スタイルと被接触好悪感の関連性 関西学院大学心理科学研究, 45, 31-35.
  66. Shirai, R., Banno, H., & Ogawa, H. (2019). Trypophobic images induce oculomotor capture

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- and inhibition. *Attention, Perception, & Psychophysics*, 81(2), 420-432.
67. Shirai, R., & Ogawa, H. (2019). Trypophobic images gain preferential access to early visual processes. *Consciousness and Cognition*, 67, 56-68.
  68. Nakajima, S. (2019). Food aversion learning based on voluntary running in non-deprived rats: A technique for establishing aversive conditioning with minimized discomfort. *Experimental Animals*, 68, 71-79.
  69. Nakajima, S. (2019). Food avoidance learning based on voluntary wheel running in laboratory mice (*Mus musculus*). *Behavioural Processes*, 159, 31-36.
  70. \*12 伏田幸平・松原彩乃・片山順一 (2017). 感情状態は文判断課題時の N400 および P600 振幅に影響する：感情誘導法に着目した検討 生理心理学と精神生理学, 35, 217-227.
  71. \*13 石井主税・片山順一 (2019). 結果事象を評価する脳内システム：社会的研究からの展望 人文論究 (関西学院大学文学部), 68, 1-25.
  72. 金喬・米山直樹 (2019). 中国における発達障害のある子どもを持つ保護者に対するペアレントトレーニングの現状と課題 ——日本との比較を通じて—— 人文論究 (関西学院大学文学部), 69, 91-110.
  73. \*14 植田瑞穂・桂田恵美子 (2019). 共感の発達に関する研究の概観と展望：正の共感を含めた理論の必要性 人文論究 (関西学院大学文学部), 69, 71-90.
  74. \*15 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2019). オキシトシンが向社会的行動にもたらす影響 人文論究, 69, 1-17.
  75. \*16 植田瑞穂・桂田恵美子 (2020). 母親のネガティブな情動的变化に対する歩行開始期の子どもの働きかけおよび共感的反応 家族心理学研究, 33.
  76. \*17 桂田恵美子 (2019). 育児放棄 (ネグレクト) と伝統的性役割観—「武豊町3歳児餓死事件」と「大阪二児置き去り死事件」から見えてくること— 日本ジェンダー研究, 22, 53-62.
  77. Nakajima, S. (2019). Further demonstration of running-based food avoidance learning in laboratory mice (*Mus musculus*). *Behavioural Processes*, 168, 103962.
  78. \*18 Fuseda, K., & Katayama, J. (2020). A new technique to measure the level of interest using heartbeat-evoked brain potential. *Journal of Psychophysiology*.
  79. Kawai, T., Yamada, H., Sato, N., Takada, M., & Matsumoto, M. (2019). Preferential representation of past outcome information and future choice behavior by putative inhibitory interneurons rather than putative pyramidal neurons in the primate dorsal anterior cingulate cortex. *Cerebral Cortex*, 29, 2339-2352.
  80. Kimura, T., & Katayama, J. (2020). Congruency of intervening events and self-induced action influence prediction of final results, *Experimental Brain Research*, 1-12.

### <図書>

1. 大竹恵子 (2015). 第6章 ポジティブ心理学 西垣悦代・堀正・原口佳典(編), コーチング心理学概論 (pp. 119-138) ナカニシヤ出版.
2. 大竹恵子 (編著) (2016). 保健と健康の心理学—ポジティブヘルスの実現 ナカニシヤ出版.
3. 片山順一・鈴木直人 (編) (2017). 生理心理学と精神生理学 堀忠雄・尾崎久記 (監修) 第II巻 応用 北大路書房 (分担執筆による佐藤暢哉の単独担当部分がコラム「ラットの援助行動」).
4. 三宅晋司 (監修) (2017). 商品開発・評価のための生理計測とデータ解析ノウハウ エヌ・ティー・エス (分担執筆による片山順一の単独担当部分が第1章, 第1節).
5. 佐藤暢哉・小川洋和 (著) (2017). なるほど!心理学実験法 三浦麻子 (監修) 心理学ベーシック第2巻 北大路書房.
6. 大竹恵子(共著) (2017). なるほど!心理学調査法 三浦麻子 (監修) 心理学ベーシック第3巻 北大路書房.
7. 坂田省吾・山田富美雄 (編) (2017). 生理心理学と精神生理学 堀忠雄・尾崎久記 (監修) 第



法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

I巻 基礎 北大路書房 (分担執筆による佐藤暢哉の単独担当部分が第3章第3節「空間学習」、第4節「社会的学習」)。

8. 片山順一 (編) (2019). 神経・生理心理学 シリーズ心理学と仕事 2 北大路書房
9. 日本行動分析学会 (編) (2019). 行動分析学事典 丸善出版. (分担執筆による中島定彦の単独担当部分が「負の強化 (除去型強化)」「反応非依存強化 強化による行動低減」「反応率分化強化 分化結果手続き」「消去」「消去後の反応再出現」「刺激馴化」「見本合わせ:基礎」「刺激等価性:基礎」「コロバン・シミュレーション計画」「強化介入による行動低減」)
10. 日本基礎心理学会 (監修) 坂上貴之・河原純一郎・木村英司・三浦佳世・行場次朗・石金浩史 (編) (2018). 基礎心理学実験法ハンドブック 朝倉書店 (分担執筆による中島定彦の単独担当部分が項目「動物実験の研究倫理」 pp. 48-49、「代表的な古典的条件づけ事態」 pp. 290-293、「古典的条件づけにおける連合構造とその表出」 pp. 294-295、「古典的条件づけの消去とそれに関係する現象」 pp. 296-297、「逃避学習と回避学習」 pp. 308-311、「オペラント条件づけにおける連合構造とその表出」 pp. 344-345、「見本合わせ法」 pp. 364-365、分担執筆による小川洋和の単独担当部分が項目「視覚探索課題」 pp. 236-237、分担執筆による佐藤暢哉の単独担当部分が項目「記憶に関わる方法」 pp. 366-367、分担執筆による後藤和宏・佐藤暢哉の担当部分が項目「意識, 内省に関わる方法—エピソード記憶, 心的時間旅行」 pp. 376-377、分担執筆による片山順一の単独担当部分が項目「脳波計測の基礎」 pp. 432-435)。
11. 日本健康心理学会 (編) (2019). 健康心理学事典 丸善出版 (分担執筆による大竹恵子の単独担当部分が第 12 章の「身体的健康における性差」「メンタルヘルスにおける性差」、小林正法・大竹恵子の共同担当部分が第 3 章の「パーソナリティ」「パーソナリティのアセスメントの種類と活用」)
12. 内山伊知郎 (監修) (2019). 中村真・武藤世良・大平英樹・樋口匡貴・石川隆行・榊原良太・有光興記・澤田匡人・湯川進太郎 (編) (監修) 感情心理学ハンドブック 北大路書房 (分担執筆による大竹恵子の単独担当部分が 17 章「感情とウェルビーイング」)

### <学会発表>

1. 片山順一 (2015). 生理心理計測の人間工学的応用 (シンポジウム) 日本人間工学会第 56 回大会 2015/6/13 (芝浦工業大学芝浦キャンパス)
2. 大森駿哉・片山順一・大竹恵子 (2015). ポジティブ感情が親切行動場面における思考—行動レパートリー—想起数と生理的反応に与える影響 日本心理学会第 79 回大会.
3. 片山順一 (2015). 言語の心理学研究・神経科学研究を応用につなげる—「わかり」の評価・可視化・促進に向けて— (シンポジウム) 日本心理学会第 79 回大会.
4. Kimura, T., & Katayama, J. (2015). The spatial expectation is modulated by congruency between approach of visual stimuli and location of subsequent somatosensory stimuli. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
5. Naka, S., & Katayama, J. (2015). The presentation timing if task irrelevant stimuli and the distraction effect. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
6. Omori, S., Otake, K., & Katayama, J. (2015). Effects of positive emotion on physiological responses and thought-action repertoires regarding helpful behavior. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
7. Sugimoto, F., & Katayama, J. (2015). Difficulty of visual oddball task modulates amplitude of P3 elicited by task-irrelevant auditory distractors (Symposium). 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
8. \*19 伏田幸平・片山順一 (2015). プローブ刺激に対する P300 は身体的魅力の違いを反映する—無関連プローブ法を用いた動画刺激に対する注意量推定による検討— 関西心理学会第 127 回大会.
9. 木村司・片山順一 (2015). 身体に接近する視覚刺激系列の違いが後続する体性感覚事象の空間的予測に与える影 関西心理学会第 127 回大会.
10. 伏田幸平・小林剛史・長野祐一郎・片山順一 (2015). 心拍数で魅力を測る—高/中/低魅力の性的/非性的画像に対する心拍数の反応— 平成 27 年度日本人間工学会関西支部大会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

11. 大竹恵子 (2015). ウェルビーイングとパフォーマンスを高める心理学：ポジティブ心理学とコーチング心理学 (シンポジウム) 日本心理学会第 79 回大会.
12. 金田亜里沙・大竹恵子 (2015). 母親の自身と子に対する楽観性—子のいない既婚女性との比較— 関西心理学会第 127 回大会.
13. 北條由華・大竹恵子 (2015). 課題固有の自己効力感が課題成績と目標設定の変容に与える影響—ポジティブフィードバックの影響に注目して— 関西心理学会第 127 回大会.
14. 湯川徳子・大竹恵子 (2015). 家庭での食事場面に対する母親の意識についての研究—母娘ペアデータを用いた間主観性の検討— 関西心理学会第 127 回大会.
15. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 選択誘発性選好の生起に刺激の再評価は不要である 日本認知心理学会第 13 回大会.
16. Sato, N. (2015). Effects of lesions of the retrosplenial cortex on episodic memory in rats: answering to an unexpected question about past self-behavior. 第 38 回大会日本神経科学学会.
17. Hayashi, T., & Sato, N. (2015). The experiment of effect of the retrosplenial cortex lesion in shortcut task. 第 38 回大会日本神経科学学会.
18. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 日本の心理学の統計教育の現状—書籍の分析による予備的検討— 日本教育心理学会第 57 回総会.
19. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 振動周波数が視覚刺激の時間知覚に与える影響 日本心理学会第 79 回大会.
20. 道野栞・佐藤暢哉 (2015). 視点移動の方法が空間記憶に与える影響 日本心理学会第 79 回大会.
21. 佐藤暢哉 (2015). ナビゲーションにおける意思決定 平成 27 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会. シンポジウム.
22. Kawai, T., Yamada, H., Sato, N., Takada, M., & Matsumoto, M. (2015). Outcome monitoring and behavioral adjustment by putative pyramidal neurons and interneurons in the primate anterior cingulate cortex during a reversal learning task. 45th Annual Meeting of Society for Neuroscience. 2
23. Sato, N., Tate, K., Okada, M. (2015). Rats demonstrate helping behavior toward a soaked cagemate. 45th Annual Meeting of Society for Neuroscience.
24. 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2015). 古典的条件づけ—道具的条件づけ間転移の文脈制御 関西心理学会第 127 回大会.
25. 福井隆雄・井上和哉・小松丈洋・佐藤暢哉 (2015). ヘッドマウントディスプレイを用いた到達把持運動における視覚・触覚情報の寄与に関する検討 日本バーチャルリアリティ学会 VR 心理学研究委員会.
26. 光藤優花・小川洋和 (2015). 静止画を用いた顔と声のマッチングにおける性格特性の印象の役割 日本認知心理学会第 13 回大会. 2015/7/4 (東京大学)
27. 安枝貴文・小川洋和 (2015). 観察者の表情筋の操作が恐怖表情の想起に干渉する 日本認知心理学会第 13 回大会.
28. 白井理沙子・小川洋和 (2015). トライポフォビア喚起画像の特性がもたらす注意処理への影響 日本認知心理学会第 13 回大会.
29. 白井理沙子・坂野逸紀・小川洋和 (2015). Saccade trajectory revealed attentional capture and inhibition by tryphobic images. 第 38 回神経科学学会. サテライトシンポジウム.
30. 光藤優花・小川洋和 (2015). 顔と声のマッチングにおける顔の周辺情報の役割 第 7 回多感覚研究会.
31. Shirai, R., Banno, H., & Ogawa, H. (2015). The spectrum characteristics of tryphobic images evoke saccade trajectory curvatures. The 23rd Annual Workshop on Object Perception, Attention, and Memory.
32. Katsurada, E., Akazawa, J., & Tanimukai, M. (2015). Institutionalized children's academic competence, adaptation to school, self-esteem, and people around them. The 4th Annual International Conference on Education, Psychology, and Society.
33. \*20 植田瑞穂・桂田恵美子 (2015). 共感テストにおける無秩序/混乱型愛着の子どもの行動 FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会第 18 回全国学術集会弘前大会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

34. \*21 植田瑞穂・桂田恵美子 (2015) 養育者評定用の幼児共感尺度開発に向けた予備的研究—母親が評定する幼児の共感の構成および妥当性— 関西心理学会第 127 回大会.
35. 里見香奈・成田健一 (2015). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析—1980 年代以降のわが国の学会誌における論文タイトルを対象として— 日本心理学会第 79 回大会.
36. 里見香奈・成田健一 (2015). 5 答法による自発的自己概念の測定—20 答法との比較から— 関西心理学会第 127 回大会.
37. 中島定彦 (2015). ラットは走ると気分が悪くなって土を食べる—異食行動で測定する走行性悪心— 日本基礎心理学会第 34 回大会.
38. Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Taketani, R., & Ono, H. (2015). A pilot study on interpersonal counseling for depression, suicidal ideation, and stress coping strategies in Japanese undergraduates. 28th World Congress of the International Association for Suicide Prevention.
39. 辻本江美・山本亜実・竹谷怜子・小野久江 (2015). 対人関係カウンセリングが有用であった学生相談の一事例 第 12 回日本うつ病学会総会・第 15 回日本認知療法学会.
40. 山本亜実・辻本江美・竹谷怜子・小野久江 (2015) 対人関係カウンセリングによる大学生の抑うつ状態の変化について 第 12 回日本うつ病学会総会・第 15 回日本認知療法学会.
41. 杉原聡子・米山直樹 (2015). スタッフトレーニングプログラムにおけるビデオ・フィードバックの効果 日本行動分析学会第 33 回年次大会.
42. 岡綾子・米山直樹 (2015). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する協同ボール運び活動を促進する指導 日本行動分析学会第 33 回年次大会.
43. 金喬・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症と知的能力障害を伴う幼児に対する課題分析を用いた着替え指導 日本認知・行動療法学会第 41 回大会.
44. 西川若菜・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症児に対する PECS を用いた要求行動の形成 日本認知・行動療法学会第 41 回大会.
45. 杉原聡子・米山直樹 (2015). スタッフトレーニングプログラムにおけるビデオ・フィードバックの効果—指導行動間の獲得性に注目して— 日本認知・行動療法学会第 41 回大会.
46. 田宮めぐみ・辻本友紀子・米山直樹・松見淳子 (2015). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究 日本認知・行動療法学会第 41 回大会.
47. 陳香純・影山美紀・遠竹美穂子・中島定彦 (2017). 飼育下のハンドウイルカの行動に及ぼす放水の効果 2017 年度春季研究発表会 (応用動物行動学会・日本家畜管理学会合同発表会).
48. \*22 植田瑞穂・桂田恵美子 (2017). 1、2 歳児が経験する達成・被賞賛状況についての予備調査 日本発達心理学会第 28 回大会.
49. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子 (2017). 施設入所児のアタッチメント表象と愛情ネットワークの特徴 日本発達心理学会第 28 回大会.
50. \*23 Sanada, M., Fuseda, K., & Katayama, J. (2017). EEG frontal alpha power asymmetry can evaluate temporal dynamics of our emotion. 24th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
51. \*24 Fuseda, K., Matsubara, A., & Katayama, J. (2017). Sadness can be related to the approach motivation: Evidence from frontal alpha power asymmetry. 24th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
52. 西村友佳・小川洋和 (2017). 潜在的態度の変化に対する魅力的な顔の効果 日本心理学会「注意と認知」研究会 第 15 回合宿研究会.
53. 白井理沙子・小川洋和 (2017). 視線の送り手の道德違反が注意誘導および選好判断に与える影響 日本心理学会「注意と認知」研究会 第 15 回合宿研究会.
54. Nishimura, Y., & Ogawa, H. (2017). Exposure to attractive faces modulates implicit moral attitude. The 2017 Annual Conference of the Korean Society for Cognitive and Biological Psychology.
55. 高橋友子・米山直樹 (2016). 新人看護職員の離職意向に関連する要因の検討 第 36 回日本看護科学学会学術集会.
56. 竹谷怜子・辻本江美・山本亜実・辻井農亜・白川治・小野久江 (2016). 大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの効果 第 16 回日本認知療法学会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

57. \*25 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2016). Oxytocin enhances rat's helping behavior for stranger. 日本動物心理学会第 76 回大会.
58. 佐藤暢哉・石井沙希 (2016). Effects of social interactions on spatial learning in a lattice maze. 日本動物心理学会第 76 回大会.
59. 湯川徳子・大竹恵子 (2016). 食物刺激呈示による感性満腹感は摂食量に影響するか 日本健康心理学会第 29 回大会.
60. 金田亜里沙・大竹恵子 (2016). 自身に対する楽観性と親密な他者に対する楽観性：母子間での比較 日本健康心理学会第 29 回大会.
61. \*26 小國龍治・大竹恵子 (2016). 児童版強み認識尺度と児童版強み活用感尺度の作成及び信頼性と妥当性の検討 日本健康心理学会第 29 回大会.
62. 井上和哉・大竹恵子 (2016). 視覚的な感性満腹感の生起における注意の重要性 日本健康心理学会第 29 回大会.
63. 玉越勢治・片山順一 (2016). ミスマッチ陰性電位を指標とした聴覚情報処理の時間的側面における研究 第 46 回日本臨床神経生理学学会学術大会. シンポジウム
64. 安枝貴文・小川洋和 (2016). 自己名に対する情動価一運動一一致性効果と自己表象の関係の検証 日本基礎心理学会第 35 回大会.
65. 白井理沙子・小川洋和 (2016). トライポフォビア喚起画像のスペクトラム特性が意識的気づきに与える影響 日本基礎心理学会第 35 回大会.
66. \*27 植田瑞穂・桂田恵美子 (2016). 乳幼児期におけるポジティブ共感—1, 2 歳児の行動についての探索的検討— 日本教育心理学会第 58 回総会.
67. 文瑞穂・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する構造化を用いた介入—音楽の模擬授業場면을対象に— 日本行動分析学会第 34 回年次大会.
68. 荒岡茉弥・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する宣言言語・要求言語の自発に関する研究 日本行動分析学会第 34 回年次大会.
69. 椎木泰華・川西舞・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴う ASD 児に対するトークン・エコノミー法の回顧的研究—従事行動または正反応に対応させて— 日本行動分析学会第 34 回年次大会.
70. 杉原聡子・金喬・米山直樹 (2016). 大学附属の相談所における保護者支援プログラムの検討 日本特殊教育学会第 54 回大会.
71. 杉原聡子・米山直樹 (2016). ADHD 児の登校行動と宿題行動に対するトークン・エコノミー法による家庭内支援の検討 日本行動分析学会第 34 回大会.
72. 箕浦有希久・高橋伸彰・成田健一 (2016). 心理調査における Satisficing 回答傾向(1)—紙筆版質問紙調査と Web 調査の比較— 日本社会心理学会第 57 回大会.
73. 白井理沙子・小川洋和 (2016). 道徳判断が視線による自動的な注意誘導に与える影響 日本社会心理学会第 57 回大会.
74. Kimura, T., & Katayama, J. (2016). The spatial expectation for subsequent somatosensory stimuli is modulated by regularity of approaching visual stimuli. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
75. \*28 Fuseda, K., & Katayama, J. (2016). Effect of physical attractiveness of the opposite sex on P2 to irrelevant probe stimuli. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
76. Naka, S., & Katayama, J. (2016). The Effect of the Task Type for the Distraction Effect. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
77. Yasueda, T., & Ogawa, H. (2016). Movement-compatibility effect for the self and other people's names. The 31st International Congress Psychology.
78. Ueda, M., & Katsurada, E. (2016). The development of empathic behaviors in Japanese toddlers. The 31st International Congress of Psychology.
79. Tanimukai, M., Akazawa, J., & Katsurada, E. (2016). Patterns of Affective Relationships and Quality of life among Institutionalized Children in Japan. The 31st International Congress of Psychology.
80. Mitsufuji, Y., & Ogawa, H. (2016). The contribution of personality impression to face-voice integration. The 31st International Congress of Psychology.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

81. Minoura, Y., & Narita, K. (2016). Examining the test-retest reliability of the state and trait version of the Two-Item Self-Esteem Scale. The 31st International Congress of Psychology.
82. \*29 Fuseda, K., & Katayama, J. (2016). Effects of physical attractiveness of the opposite sex on heartbeat evoked potential in men. The 31st International Congress of Psychology.
83. 林朋広・佐藤暢哉 (2016). Effects of lesions of the retrosplenial cortex on tracing the learned route in the environment with small change. 第39回日本神経科学大会.
84. Sato, N. (2016). Episodic-like memory in rats: answering to an unexpected question about past self-behavior. 18th meeting of the International Society for Comparative Psychology.
85. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた自尊感情の変動性の測定 日本感情心理学会第24回大会.
86. 佐藤暢哉・稲岡慧 (2016). ヴァーチャル環境におけるルート知識の空間手がかりと主観的方向感覚との関係 日本認知心理学会第14回大会.
87. Taketani, R., Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016). IPC-Study 1: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Depression in Japanese Undergraduates. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
88. Yamamoto, A., Taketani, R., Tsujimoto, E., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016). IPC-Study 2: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Stress Coping in Japanese Undergraduates. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
89. Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Taketani, R., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016). IPC-Study 3: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Impulsivity Response Inhibition. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
90. 木村司・片山順一 (2016). 身体近傍空間および身体へ接近する視覚情報が後続する体性感覚事象の空間的予測に及ぼす影響 第34回日本生理心理学会大会.
91. 大森駿哉・片山順一 (2016). 2種類のパズルゲーム課題が脳波・自律系指標に与える影響の検討—ポジティブ感情および集中に注目して— 第34回日本生理心理学会大会.
92. \*30 伏田幸平・片山順一 (2016). 異性の身体的魅力が無関連プローブ刺激に対する事象関連脳電位P2に及ぼす影響 第34回日本生理心理学会大会.
93. 小松丈洋・沼田恵太郎・佐藤暢哉・嶋崎恒雄・八木昭宏・宮田洋(2016). 不確実性がネガティブ感情に与える影響—SCCとNPVを指標として(2)— 第34回日本生理心理学会大会.
94. 沼田恵太郎・小松丈洋・嶋崎恒雄・佐藤暢哉・八木昭宏・宮田洋 (2016). 不確実性がネガティブ感情に与える影響—SCCとNPVを指標として(1)— 第34回日本生理心理学会大会.
95. 白井理沙子・小川洋和 (2016). 無意識的処理過程に不快喚起特性が与える影響 日本心理学会「注意と認知」研究会第14回会宿研究会.
96. \*31 Sanada, M., Kobayashi, M., Otake, K., & Katayama, J. (2018). Frontal alpha asymmetry and heart rate synchronized during emotional experience when people show facial expression. 25th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
97. \*32 Fuseda, K., & Katayama, J. (2018). ERP probe technique without probe stimulus: Heartbeat-evoked potentials reflect physical attractiveness. 25th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
98. \*33 植田瑞穂・桂田恵美子 (2018). 他者の達成に対する2歳児の共感的反応と関連する要因 日本発達心理学会第29回大会.
99. 吉岡映理・桂田恵美子 (2018). 同性愛者・両性愛者らのカミングアウトによる心理的効果 日本発達心理学会第29回大会.
100. 掘麻佑子・沼田恵太郎・桂田恵美子 (2018). 子どもの因果学習 日本発達心理学会第29回大会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

101. 桂田恵美子 (2018). 1歳児の愛着は1年後、2年後の問題行動を予測するか 日本発達心理学会第29回大会.
102. 中島定彦 (2017). ラットは土を食べて悪心を癒す—カオリン摂取による味覚嫌悪学習の緩和— 日本基礎心理学会第35回大会.
103. 白井理沙子・小川洋和 (2017). 視線の有効性と周囲の情動価の統合的処理が人物の信頼性判断に及ぼす影響 日本基礎心理学会第36回大会.
104. \*34 Sanada, M., Kobayashi, M., Otake., K., & Katayama, J. (2017). Frontal alpha power asymmetry shows different temporal pattern between negative and positive emotions. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
105. Sugimoto, F., Kimura, M., Takeda, Y., & Katayama, J. (2017). Involvement of temporal attention in task-difficulty effect on P3a. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
106. Yamagata, T., Katayama, J., & Murata, A. (2017). Emotionally supportive messages reduced attention to social exclusion cues: An event-related brain potential (ERP) study. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
107. \*35 Fuseda, K., & Katayama, J. (2017). You cannot ignore a person with high physical attractiveness. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
108. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). The contingency between self-action and intervening events generates the expectation of subsequent result. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
109. Naka, S., & Katayama, J. (2017). The effect of task difficulty and response type for duration discrimination on distraction. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
110. Michino, S., Hirata, R., & Sato, N. (2017). Contextual semantic comprehension of a word written with different Japanese orthography. 57th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
111. Ogai, T., & Nakajima, S. (2017). Comparison of three extinction procedures for extinction of avoidance behavior in rats. The 43rd Annual Convention of the Association for Behavior Analysis: International.
112. Nakajima, S. (2017). What clay eating talks about running-based taste avoidance in rats. XXIX International Conference of the Spanish Society for Comparative Psychology.
113. \*36 Oguni, R., & Otake, K. (2017). Relation among character strengths, positive empathy, and subjective happiness. 31st Conference of the European Health Psychology Society.
114. 廣瀬真理子・高岡しの・庭山和貴・杉原聡子・荒岡茉弥・米山直樹・松見淳子 (2017). 青年期発達障害者の家族に向けたコミュニケーション支援プログラムの効果の検討—自治体と大学が協働する地域発達支援 ②— 日本認知・行動療法学会第43回大会.
115. 荒岡茉弥・清水莉奈・椎木泰華・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対するカテゴリー化訓練とネーミング訓練による片付け行動の形成 日本行動分析学会第35回年次大会.
116. 渡邊佳奈・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児を対象とした遊びにおける交互交代行動の獲得に向けた環境設定 日本行動分析学会第35回年次大会.
117. 杉原聡子・金 喬・富井あゆみ・米山直樹 (2017). 発達障害のある子どもの親の参加者間相互ビデオフィードバックの効果の検討 日本行動分析学会第35回年次大会.
118. 文瑞穂・潮海幸紀・米山直樹 (2017). 自閉傾向の男児に対する交互交代遊びの獲得のための

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

刺激性制御の検討—終わりの回数が不確定なゲームを用いて— 日本行動分析学会第35回年次大会.

119. 安井梨恵・金喬・米山直樹 (2017). 市町村保健センターにおける短縮版ペアレント・トレーニングのプログラムの有効性についての検討 (2) 日本認知・行動療法学会第43回年次大会.
120. 杉原聡子・金喬・米山直樹 (2017). 発達障害のある子どもの親の参加者間相互ビデオフィードバックの効果の検討 日本行動分析学会第35回年次大会.
121. 金喬・米山直樹 (2017). ペアレント・トレーニングの効果測定を目的とするKBPA追加項目作成の試み 日本行動分析学会第35回年次大会.
122. 栗田聡子・片山順一・Annie Lang (2017). 脱感作 vs. 鋭敏化? 暴力的ゲーム経験と情報処理: 事象関連脳電位と心拍数データによる検討 日本心理学会第81回大会.
123. 片山順一 (2017). 英語能力評価における最新の取り組み: テスト開発・教育・脳研究の立場から 日本心理学会第81回大会.
124. \*37 小林正法・真田原行・片山順一・太竹恵子 (2017). ノスタルジア状態の生理的特徴: 音楽聴取によるノスタルジア状態喚起を用いて 日本心理学会第81回大会.
125. \*38 小國龍治・大竹恵子 (2017). 親切の強みとポジティブ感情への共感が主観的幸福感に及ぼす影響 日本心理学会第81回大会.
126. \*39 大竹恵子・片山順一 (2017). ポジティブ感情の機能を探る: さまざまな評価法を用いたアプローチ 日本心理学会第81回大会.
127. 中島定彦 (2017). エクスポージャー法による治療後の症状再発に関する実験心理学的考察—動物の条件づけ研究からの架橋— 日本心理学会第81回大会.
128. 中島定彦・三好由佳子 (2017). コカ・コーラのテレビ広告は条件づけ法則に合致しているか?—1960~1990年代放映のCMフィルム58本の分析— 日本心理学会第81回大会.
129. 藤山北斗・佐藤暢哉 (2017). 模写の正確性を高める昇目の効果 日本心理学会第81回大会.
130. 道野菜・佐藤暢哉 (2017). 複数視点から物体位置を記憶する際の参照軸 第81回大会日本心理学会.
131. 久須美沙紀・中島定彦・成田健一 (2017). 犬は飼い主に似ているのか?—質問紙調査による性格の類似性検討— 関西心理学会第129回大会.
132. 道野菜・佐藤暢哉 (2017). 前後軸を有する環境内での物体位置記憶の統合 関西心理学会129回大会.
133. \*40 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2017). ラットの援助行動にオキシトシンが及ぼす影響 関西心理学会第129回大会.
134. 山本亜実・竹谷怜子・辻本江美・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). ストレス因子を考慮した大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの効果 第14回日本うつ病学会総会 第17回日本認知療法・認知行動療法学会.
135. 辻本江美・竹谷怜子・山本亜実・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). 対人関係カウンセリングが回避的なストレス対処方法を減少させ気分改善に繋がった学生相談の一事例 第14回日本うつ病学会総会 第17回日本認知療法・認知行動療法学会.
136. 齊藤由佳・竹谷怜子・辻本江美・山本亜実・小野久江 (2017). 双極Ⅱ型障害の服薬指導に個人心理教育の手法を用いた一例—患者と薬剤師が交互にテキストを音読する試み— 第11回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会大会.
137. 竹谷怜子・小野久江 (2017). ADHD児担当の有無による教員のQOLの違い 日本学校メンタルヘルス学会第21回大会.
138. 辻本江美・山本亜実・竹谷怜子・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). 大学生の抑うつ状態

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- に対する対人関係カウンセリングの長期的効果の検討 第41回日本自殺予防学会総会.
139. 桂田恵美子・赤澤淳子・谷向みつえ (2017). 対子ども効力感尺度の作成 日本教育心理学会第59回総会.
140. 赤澤淳子・桂田恵美子・谷向みつえ (2017). 児童養護施設における個別学習支援プログラムの効果検証—児童および大学生の変化の関連— 日本教育心理学会第59回総会.
141. \*41 小林正法・大竹恵子 (2017). 抑うつ傾向と主観的幸福感がノスタルジア状態の喚起に与える影響—音楽聴取によるノスタルジア状態誘導を用いて— 日本パーソナリティ心理学会第26回大会.
142. \*42 小國龍治・大竹恵子 (2017). 自伝的記憶の想起が親切動機と認識に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第26回大会.
143. 大竹恵子・嶋田洋徳 (2017). 日本健康心理学会における利益相反と出版倫理 (2) 日本健康心理学会第30回大会.
144. 白井理沙子・小川洋和 (2017). 人物の道德情報と魅力度が視覚的気づきに及ぼす影響 日本社会心理学会第58回大会.
145. \*43 林朋広・佐藤暢哉 (2017). ラットにおけるエピソード記憶と脳梁膨大後部皮質の関連行動2017.
146. \*44 高橋良幸・佐藤暢哉 (2017). ラットにおけるランダムドットパターン誘発性探索行動 行動2017.
147. \*45 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2017). ラットにおける援助行動の獲得に伴うc-fos発現 行動2017.
148. Yamamoto, A., Taketani, R., Tsujimoto, E., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2017). Effect of Interpersonal Counseling on Subthreshold Depression in Undergraduates - A Preliminary Study Considering Distress Type -. ISIPT : 7th Conference of the International Society of Interpersonal Psychotherapy.
149. 高山博司・小川洋和 (2017). 個人特性が情動プライミングによる不正行為の誘発に与える影響 日本認知心理学会第15回大会.
150. 箕浦有希久・成田健一 (2017). 状態2項目自尊感情尺度の再検査信頼性の検討 日本感情心理学会第25回大会.
151. 小林正法・大竹恵子 (2017). 写真撮影が導く感情記憶の忘却 第15回日本認知心理学会大会.
152. Shirai, R., & Ogawa, H. (2017). The effect of tryphobic images on conscious awareness during continuous flash suppression. The 2017 VSS Annual Meeting.
153. 仲早苗・片山順一 (2017). 呈示時間弁別の反応方法と課題難度が妨害効果に及ぼす影響 第35回日本生理心理学会大会.
154. \*46 伏田幸平・片山順一 (2017). 身体的魅力が惹きつける注意は刺激の物理特性の影響ではない 第35回日本生理心理学会大会.
155. 大塚拓朗・片山順一 (2017). 懸念的被透視感と隠匿情報検査の反応の関係 第35回日本生理心理学会大会.
156. 木村司・片山順一 (2017). 自己の行為に対する随伴性が後続事象の空間的予測に与える影響 第35回日本生理心理学会大会.
157. Katsurada, E., Akazawa, J., & Tanimukai, M. (2017). Attachment patterns and the quality of interactions between children and care-workers in Japanese institutions. 2017 SRCD Biennial Meeting.
158. \*47 Ueda, M., & Katsurada, E. (2017). The development of “positive empathy” early



法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- in life. 2017 SRCD Biennial Meeting.
159. 高橋伸彰・成田健一 (2018). データを毀損するのは調査モニタか, インターフェースか? : 調査 モニタに対する Web 調査と郵送調査の比較 日本社会心理学会第 59 回大会.
  160. 高橋伸彰・成田健一 (2018). 不正回答者はいつでも不正回答者か? : Web による縦断的調査における Satisficing 回答傾向の解析から 日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会.
  161. \*48 真田原行・三好純太郎・片山順一 (2018). ネガティブ感情は視覚的ワーキングメモリ検索過程に対応する事象関連電位の振幅を減衰させる 日本心理学会第 82 回大会.
  162. \*49 伏田幸平・松原彩乃・片山順一 (2018). 読み手の感情状態は日本語文処理に影響する 日本心理学会第 82 回大会.
  163. 趙アルム・米山直樹 (2018). ダウン症児における同一見本あわせを用いた色概念の形成 日本行動分析学会第 36 回年次大会.
  164. 名取咲希・荒岡茉弥・米山直樹 (2018). ASD 児における大小弁別の獲得を目的とした大小のひらがなカードによるネーミングの効果 日本行動分析学会第 36 回年次大会.
  165. 岩城夢由菜・米山直樹 (2018). ダウン症児に対するスプーン使用の指導における視覚的手がかりとフェイディングの有効性 日本行動分析学会第 36 回年次大会.
  166. 中島定彦 (2018). 味覚嫌悪学習を知る—ラットの行動研究から— 日本行動分析学会第 36 回年次大会.
  167. \*50 Yamagishi, A., & Sato, N. (2018). Behavior of a demonstrator affects helping behavior of an observer in rats. 日本動物心理学会第 78 回大会.
  168. Sato, N., Zhu, Q., & Takahashi, Y. (2018). The effect of prior visual exploration on the following in situ exploration in rats. 日本動物心理学会第 78 回大会.
  169. Sato, A., & Sato, N. (2018). Discrimination of shape of mazes in rats. 日本動物心理学会第 78 回大会.
  170. 道野栞・佐藤暢哉 (2018). 多視点観察時に生じる空間記憶統合の阻害 日本心理学会第 82 回大会.
  171. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子 (2018). 児童養護施設入所児童のアタッチメント表象の変化 日本心理学会第 82 回大会.
  172. 高岡しの・大竹恵子 (2018). ユーモアは対人葛藤場面での対処法として有効か 日本心理学会第 82 回大会.
  173. 林敦子・大竹恵子 (2018). 健常高齢者における記憶モニタリングと精神的健康度との関連 日本心理学会第 82 回大会.
  174. \*51 大竹恵子 (2018) ポジティブ感情を支える諸要因: 過去・現在・未来から見た役割 日本心理学会第 82 回大会.
  175. \*52 小國龍治・小林正法・大竹恵子 (2018). 想像は援助動機を高める—援助効力感の役割— 日本心理学会第 82 回大会.
  176. \*53 小林正法・大竹恵子 (2018). ノスタルジアは外集団顔の信頼性評価を高める 日本心理学会第 82 回大会.
  177. 大竹恵子 (2018). セルフ・エスティーム(SE)研究の抜本的再考(4)—ローゼンバーグ尺度ならびに常態化する SE 教育からの脱却— 日本教育心理学会第 60 回大会.
  178. 中島定彦 (2018). 嫌悪処置なしで形成するラットの味覚嫌悪学習 日本動物心理学会第 82 回大会.
  179. 中島定彦・大井舞子 (2018). マウスにおける走行性味覚嫌悪学習 日本動物心理学会第 82 回大会.
  180. 竹谷玲子・小野久江 (2018). ADHD の知識による教員の QOL の違い 日本学校メンタルヘルス学会第 22 回大会.
  181. \*54 Sanada, M., Miyoshi, J., & Katayama, J. (2018). Negative emotion reduces ERP amplitude reflecting visual working memory retrieval. 58th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
  182. \*55 Ishii, C., & Katayama, J. (2018). Stimulus valence influences the evaluative processing of action outcome. 58th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
  183. \*56 Fuseda, K., & Katayama, J. (2018). The physical attractiveness of the opposite sex

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- has important information that cannot be overlooked. 58th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
184. Nakajima, S. (2018). Running-based taste aversion learning in mice. 126th Annual Convention of the American Psychological Association.
  185. Katsurada, E., Tanimukai, M., & Akazawa, J. (2018). A study of association among attachment patterns, maltreatment and behavior problems in institutionalized children in Japan. 20th International Conference on Pediatrics & Primary Care.
  186. Hayashi, T., & Sato, N. (2018). Effect of lesions of the retrosplenial cortex on tracing a learned route that includes a small change in spatial structure. Neuroscience 2018.
  187. \*57 Yamagishi, A., & Sato, N. (2018). Activation of oxytocin receptor-expressing neurons in anterior cingulate cortex during helping behavior in rats. Neuroscience 2018.
  188. \*58 Oguni, R., Kobayashi, M., & Otake, K. (2018). Imagination enhances helping intention: The role of helping efficacy. Object Perception, visual Attention, and visual Memory 2018.
  189. \*59 真田原行・片山順一 (2018). 感情喚起下における前頭  $\alpha$  パワー左右差と心拍数の同調 第 36 回日本生理心理学会大会.
  190. \*60 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2018). The role of oxytocin receptor-expressing neurons in anterior cingulate cortex on helping behavior in rats. 第 41 回日本神経科学大会.
  191. 大竹恵子 (2018). 健康心理学における援助要請—心身のケアを届けるために— 日本健康心理学会第 31 回大会.
  192. 大竹恵子 (2018). 日本健康心理学会における利益相反と出版倫理 (3) —新しい倫理チェック体制の導入紹介と研究倫理における学会会員間の考え方の共有を目指して— 日本健康心理学会第 31 回大会.
  193. 大竹恵子 (2018). ステレオタイプな「望ましい健康像」の再検討—エビデンスに基づく健康の保持増進の心理学的支援— 日本健康心理学会第 31 回大会.
  194. 小國龍治・小林正法・大竹恵子 (2018). エピソードシミュレーションが援助効力感に及ぼす影響—時間的距離に焦点を当てて— 日本健康心理学会第 31 回大会.
  195. 小林正法・大竹恵子 (2018). 喫煙に対する潜在的・顕在的態度とその変容可能性 日本健康心理学会第 31 回大会.
  196. 高橋梨紗・片山順一 (2018). 虚記憶に関する警告が虚記憶生起過程に与える影響：事象関連脳電位を用いた検討 第 36 回日本生理心理学会大会.
  197. 大塚拓郎・片山順一 (2018). 隠蔽対象の状態と隠匿情報検査の弁別的反応の関係 第 36 回日本生理心理学会大会.
  198. 片山夏果・真田原行・片山順一 (2018). 読書によって高められた共感は表情への注意を増大する 第 36 回日本生理心理学会大会.
  199. \*61 石井主税・片山順一 (2018). 行動結果の評価は刺激価との組み合わせで変容する 第 36 回日本生理心理学会大会.
  200. \*62 伏田幸平・片山順一 (2018). 異性の身体的魅力はそれが課題無関連情報でも注意を惹きつける 第 36 回日本生理心理学会大会.
  201. \*63 Ueda, M., & Katsurada, E. (2018). Factors related to positive response of two-year-old children to another person's achievement. 25th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioral Development.
  202. Katsurada, E., & Yoshioka, E. (2018). Psychological effects of coming-out in homosexual or bisexual people. 25th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioral Development.
  203. Shirai, R., & Ogawa, H. (2018). Integrated effect of gaze cueing and valence of 'gazed' objects on facial trustworthiness. The Annual Meeting of Vision Sciences Society 2018.
  204. 中島定彦 (2018). ラットは腹具合が悪いと土を喰うか—乳糖不耐症の場合— 日本基礎心理学会第 32 回大会.
  205. 道野栞・佐藤暢哉 (2018). 物体位置に関する視覚・言語情報の呈示が空間的視点取得に及ぼす影響 日本基礎心理学会第 37 回大会.
  206. 長谷川依保・中島定彦 (2019). その動物はなぜ怖い—大学生を対象とする質問紙調査— ヒト

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

と動物の関係学会第 25 回学術大会.

207. Katayama, N., Sanada, M., & Katayama, J. (2019). Enhanced empathic state caused by reading fiction promotes detection of and attention to task-irrelevant facial expressions. The 26th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
208. Fuseda, K. & Katayama, J. (2019). A new technique for evaluating interesting dynamic stimuli using eye-fixation related brain potential. The 26th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
209. Katsurada, E., & Yoshioka, E. (2019). Psychological effects of coming out on homosexual or bisexual individuals in Japan: quantitative and qualitative results. 2019 SRCD Biennial Meeting.
210. 小林正法・小國龍治・大竹恵子 (2019). 「助ける」想像と「助けない」想像が援助行動意図に与える影響 第 17 回日本認知心理学会大会.
211. 佐藤暢哉・沖悠司・道野栞 (2019). 回想的映像に対する事象関連脳電位. 第 37 回日本生理心理学会大会.
212. 西村友佳・小川洋和 (2019). 自人種顔と他人種顔に対する視覚性短期記憶の符号化速度 日本認知心理学会第 17 回大会.
213. 小林穂波・小川洋和 (2019). 自己観の変化が視覚的注意のスポットライトの大きさを調節する 日本認知心理学会第 17 回大会.
214. 伏田幸平・鈴木聡・岩川幹生・片山順一 (2019). 間違い探し課題時における注意資源配分量の時系列変化:眼球停留関連脳電位を用いた検討 第 63 回システム制御情報学会研究発表講演, 中央電気倶楽部.
215. 松本敦・片山順一・尾島司郎・成瀬康・井原綾 (2019). 脳波を用いた外国語能力の評価 第 63 回システム制御情報学会研究発表講演会, 中央電気倶楽部.
216. \*64 真田原行・桑本貴之・片山順一 (2019). 3 音オドボール課題場面における, 協和音・不協和音による注意捕捉の違い 第 37 回日本生理心理学会大会.
217. 高橋梨紗・片山順一 (2019). 気分が虚記憶生起過程に与える影響の検討 第 37 回日本生理心理学会大会.
218. 大塚拓郎・片山順一 (2019). 記憶対象の情報量の違いは隠匿情報検査の弁別的反応に影響を及ぼすのか? 第 37 回日本生理心理学会大会.
219. 伏田幸平・片山順一 (2019). 眼球停留関連脳電位 (EFRP) を用いて課題無関連情報としての身体的魅力が惹きつける注意を測る 第 37 回日本生理心理学会大会.
220. 片山夏果・片山順一 (2019). 高い共感特性は課題非関連の表情認知を促進する 第 37 回日本生理心理学会大会.
221. \*65 石井主税・片山順一 (2019). 集団課題時における行為結果の一致性は結果の情動的重要性を高める 第 37 回日本生理心理学会大会.
222. Sato, N., Yamagishi, A., Inutsuka, A., & Onaka, T. (2019). Involvement of anterior cingulate cortex in helping behavior in rats. The 42th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.
223. 上田ひとみ・坂根遥・澤村勇希・川上卓朗・寺本航起・竹谷玲子…小野久江 (2019). ASD 傾向の有無による対人関係カウンセリングの大学生の抑うつ状態への効果 第 16 回日本うつ病学会総会 .
224. 澤村勇希・川上卓朗・寺本航起・上田ひとみ・坂根遥・竹谷玲子…小野久江 (2019). ADHD 傾向の有無による対人関係カウンセリングの大学生の抑うつ状態への効果. 第 16 回日本うつ病学会総会 .
225. 竹谷玲子・辻本江美・山本亜実・上田ひとみ・坂根遥・辻井農亜…小野久江 (2019). 対人関係カウンセリングの大学生の抑うつ状態への効果 第 16 回日本うつ病学会総会 .
226. Kobayashi, H., & Ogawa, H. (2019). Reading direction influences the deployment of visual attention during word processing. Asia-Pacific Conference on Vision 2019.
227. 寺本航起・坂根遥・川上卓朗・上田ひとみ・澤村勇希・竹谷玲子…小野久江 (2019). 対人関係カウンセリングの大学生のコーピングスタイルへの効果 第 19 回日本認知療法・認知行動療法学会.
228. 川上卓朗・坂根遥・寺本航起・上田ひとみ・澤村勇希・竹谷玲子…小野久江 (2019). 大学生に

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- おける対人関係カウンセリングの抑うつ状態に対する長期的効果 第 19 回日本認知療法・認知行動療法学会.
229. \*66 Oguni, R., Kobayashi, M., & Otake, K. (2019). Effect of imagination on prosociality: The role of anticipated positive emotion. 13th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology.
230. Kobayashi, M., & Otake, K. (2019). Implicit and explicit attitudes toward passive smoking in subtypes of non-smokers. 13th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology.
231. 小林穂波・小川洋和 (2019). 文脈手がかりは視覚探索処理の初期段階を促進する 日本基礎心理学会第 38 回大会.
232. 小林穂波・小川洋和 (2019). 読み方向のプライミングが単語の並列処理を促進する 関西心理学会第 131 回大会.
233. 小林正法・大竹恵子・井上和哉 (2019). 食物画像評価データベースの作成:日本食を中心に 日本基礎心理学会第 38 回大会.
234. 小松丈洋・幸地あゆみ・道野栞・佐藤暢哉 (2019). 生理反応に対する隠蔽意図が CIT に与える影響 日本基礎心理学会第 38 回大会.
235. \*67 道野栞・小松丈洋・佐藤暢哉 (2019). 同時弁別課題時における接近・回避行動の学習過程の検討 日本基礎心理学会第 38 回大会.
236. 北野孝太・山岸厚仁・佐藤暢哉 (2019). The effect of helped/non-helped experience on helping behavior in rats. 日本動物心理学会第 79 回大会.
237. 佐藤朱夏・佐藤暢哉 (2019). Discrimination of the shape of looped runways in rats. 日本動物心理学会第 79 回大会.
238. 林朋広・池川真奈・佐藤暢哉 (2019). An attempt to clarify spatial abilities of rats in a three-dimensional maze. 日本動物心理学会第 79 回大会.
239. \*68 高橋良幸・佐藤暢哉 (2019). Do rats keep on obtaining the redundant information? 日本動物心理学会第 79 回大会.
240. 山岸厚仁・内田有咲・佐藤暢哉 (2019). Rats help conspecifics even when they receive aversive stimuli to do it. 日本動物心理学会第 79 回大会.
241. 長谷川依保・中島定彦 (2019). Associative blocking effect on running-based taste aversion learning in rats. 日本動物心理学会第 79 回大会.
242. 桂田恵美子 (2019). 日本の社会文化的環境における親子のアタッチメントの特徴 日本心理学会第 83 回大会. (指定討論者)
243. 小林正法・小國龍治・大竹恵子 (2019). 予期 Warm-glow 及び予期罪悪感は援助行動意図と正に関連する 日本心理学会第 83 回大会.
244. 小國龍治・大竹恵子 (2019). 感謝喚起手法の比較検討—想起と筆記に焦点を当てて— 日本教育心理学会第 61 回大会.
245. 大竹恵子 (2019). 事典企画シンポジウム:健康心理学の研究実践領域における現状と課題 日本健康心理学会第 32 回大会.
246. 山本舞香・大竹恵子 (2019). 感謝介入が睡眠問題と主観的幸福感に及ぼす影響 日本健康心理学会第 32 回大会.
247. 豊田雪乃・大竹恵子 (2019). 見知らぬ他者に対する援助想像が援助意図に及ぼす影響——イラストを用いた検討—— 日本健康心理学会第 32 回大会.
248. 小國龍治・大竹恵子 (2019). 感謝が他者関連レパトリーに及ぼす影響 日本健康心理学会第 32 回大会.
249. 高橋伸彰・成田健一 (2019). Web 調査における画面レイアウトの違いは回答姿勢に影響を与えるか?——同一の調査項目を調査会社 1 社のモニタに施行して—— 日本心理学会第 83 回大会.
250. 長谷川依保・中島定彦 (2019). ラットの走行性味覚嫌悪学習における阻止効果検出の試み 日本心理学会第 83 回大会.
251. 中島定彦 (2019). 阻止効果(blocking effect)の普遍性と頑健性について 日本心理学会第 83 回大会.
252. 北田智子・中山歩・米山直樹 (2019). 知的能力障害児における模擬場面を用いた授業準備行

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- 動の形成—リングファイルの指導方法を踏まえて— 日本行動分析学会第 37 回年次大会.
253. 岩城夢由菜・米山直樹 (2019). ダウン症児に対する大小弁別の学習促進に有効な指導方法の比較検討 日本行動分析学会第 37 回年次大会.
254. 金喬・米山直樹 (2019). 父親に対するこだわり行動が頻発する ASD 児を対象とした個別ペアレント・トレーニング 日本行動分析学会第 37 回年次大会.
255. 長野日菜子・清水麻衣・米山直樹 (2019). 自閉スペクトラム症児に対するひらがなカードを用いた左右弁別の指導 日本行動分析学会第 37 回年次大会.
256. 寺本航起・坂根遥・川上卓朗・上田ひとみ・澤村勇氣・竹谷怜子…小野久江 (2019). 対人関係カウンセリングの大学生のコーピングスタイルへの効果 第 19 回日本認知療法・認知行動療法学会.
257. 川上卓朗・坂根遥・寺本航起・上田ひとみ・澤村勇希・山本亜実…小野久江 (2019). 大学生における対人関係カウンセリングの抑うつ状態に対する長期的効果 第 19 回日本認知療法・認知行動療法学会.
258. Kobayashi, H., Muto, H., Shimizu, H., & Ogawa, H. (2019). A Bayesian hierarchical diffusion model of flanker interference. Paper presented at the Object Perception, Attention, & Memory.
259. Nakajima, S. (2019). Establishing aversive conditioning in rats and mice with minimized discomfort. 58th Annual Convention of the Taiwan Psychological Association.
260. Kobayashi, M., Oguni, R., & Otake, K. (2019). Anticipated warm-glow and guilt increase the intention to help a person in need in episodic simulation. 21st Conference of the European Society for Cognitive Psychology.
261. Yamagata, T., Kinjo, T., Katayama, J., & Murata, A. (2019). Delay effects on neural evaluation of monetary gains and losses: An event-related brain potential (ERP) study. 59th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
262. \*69 Sanada, M., Kuwamoto, T., & Katayama, J. (2019). Consonance captures attention more strongly than dissonance when attentional resources are insufficient; ERP and three - stimulus oddball paradigm study. 59th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
263. \*70 Ishii, C., & Katayama, J. (2019). Outcome evaluation on three-person time-estimation task with simultaneous EEG recording. 59th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
264. Kurita, S., Fuseda, K., & Katayama, J. (2019). Reexamining P300 and secondary task reaction time elicited by electrical probes while watching emotionally varied films through individual differences in motivational activation. 59th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.

### <研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等  
 ※ホームページで公開している場合には、URL を記載してください。

研究成果の公開や研究会等の開催情報は、関西学院大学応用心理科学研究センターのホームページ (<http://kgu-caps.com/>) で随時情報提供してきた。

### <既に実施しているもの>

情動や本研究プロジェクトに関する国内外の最新の知見や理解をさらに深めるための研究会や講演会、シンポジウム、ワークショップ等を、不定期で開催している。外部から関連研究者を積極的に招聘し、毎回活発な議論と情報交換が行われている。いずれも広く学内外の関連研究者・関連機関に対して開催を告知しており、毎回多数の参加者を得ている。(以下のリストは、各回の講演者と URL を示す)。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

【 CAPS 研究会 】(令和 2 年 2 月現在 40 回開催済)

- 第 1 回(2015/10/26) 寺澤悠理先生 (慶応義塾大学) <http://kgu-caps.com/news/133/>  
 第 2 回(2015/11/30) 浅野良輔先生 (浜松医科大学) <http://kgu-caps.com/news/179/>  
 第 3 回(2015/12/14) 竹島康博先生 (文京学院大学) <http://kgu-caps.com/news/271/>  
 第 4 回(2016/1/29) 川合隆嗣先生 (筑波大学) <http://kgu-caps.com/news/335/>  
 第 5 回(2016/3/4) 真田原行先生 (東京大学) <http://kgu-caps.com/news/484/>  
 第 6 回(2016/3/17) 小林正法先生 (名古屋大学) <http://kgu-caps.com/news/502/>  
 第 7 回(2016/3/17) 高橋良幸先生 (専修大学) <http://kgu-caps.com/news/512/>  
 第 8 回(2016. 4. 5) 松永昌宏先生 (愛知医科大学) <http://kgu-caps.com/news/510/>  
 第 9 回(2016. 6. 2) 西口雄基先生 (東京大学) <http://kgu-caps.com/news/655/>  
 第 10 回(2016. 6. 29) Teresa Romero 先生 (東京大学) <http://kgu-caps.com/news/678/>  
 第 11 回(2016. 9. 12) 上野泰治先生 (高千穂大学) <http://kgu-caps.com/news/839/>  
 第 12 回(2016. 10. 4) 大西賢治先生 (東京大学) <http://kgu-caps.com/news/848/>  
 第 13 回(2016. 10. 15) 有光興記先生 (駒澤大学) <http://kgu-caps.com/news/851/>  
 第 14 回(2016. 11. 30) 池田功毅先生 (中京大学) <http://kgu-caps.com/news/664/>  
 第 15 回(2016. 12. 13) 伊藤友一先生 (慶應義塾大学) <http://kgu-caps.com/news/876/>  
 第 16 回(2017. 5. 25) 松本昇先生 (京都大学) <http://kgu-caps.com/news/1361/>  
 第 17 回(2017. 6. 22) 横田秀夫先生 (理化学研究所) <http://kgu-caps.com/news/1371/>  
 第 18 回(2017. 7. 3) 橋彌和秀先生 (九州大学) <http://kgu-caps.com/news/1377/>  
 第 19 回(2017. 7. 13) 福島宏器先生 (関西大学) <http://kgu-caps.com/news/1375/>  
 第 20 回(2017. 8. 1) 平 伸二先生 (福山大学) <http://kgu-caps.com/news/1419/>  
 第 21 回(2017. 8. 1) Robin Orthey 先生 (福山大学・Maastricht University)  
<http://kgu-caps.com/news/1408/>  
 第 22 回(2017. 11. 6) 森口佑介先生 (京都大学) <http://kgu-caps.com/news/1535/>  
 第 23 回(2018. 1. 8) 神前裕先生 (早稲田大学) <http://kgu-caps.com/news/1748/>  
 第 24 回(2018. 2. 12) 和田真先生 (国立障害者リハビリテーションセンター)  
<http://kgu-caps.com/news/1752/>  
 第 25 回(2018. 2. 22) 松田いづみ先生 (科学警察研究所) <http://kgu-caps.com/news/1771/>  
 第 26 回(2018. 5. 31) 鹿子木康弘先生 (追手門学院大学) <http://kgu-caps.com/news/2120/>  
 第 27 回(2018. 6. 14) 守谷順先生 (関西大学) <http://kgu-caps.com/news/2132/>  
 第 28 回(2018. 7. 12) 木村健太先生 (産業技術総合研究所) <http://kgu-caps.com/news/2186/>  
 第 29 回(2018. 9. 19) 兎田幸司先生 (早稲田大学) <http://kgu-caps.com/news/2311/>  
 第 30 回(2018. 10. 30) 木村元洋先生 (産業技術総合研究所) <http://kgu-caps.com/news/2318/>  
 第 31 回(2018. 11. 15) 中村加枝先生 (関西医科大学) <http://kgu-caps.com/news/2205/>  
 第 32 回(2018. 12. 11) 森数馬先生 (CiNet) <http://kgu-caps.com/news/2350/>  
 第 33 回(2019. 1. 30) 後藤和宏先生 (相模女子大学) <http://kgu-caps.com/news/2370/>  
 第 34 回(2019. 6. 20) 堀田崇先生 (京都大学) <http://kgu-caps.com/news/2691/>  
 第 35 回(2019. 7. 18) 小澤貴明先生 (筑波大学) <http://kgu-caps.com/news/2700/>  
 第 36 回(2019. 9. 9) Liam Satchell 先生 (University of Winchester) Joanne Rechdan 先生  
(De Montfort University) <http://kgu-caps.com/news/2755/>  
 第 37 回(2019. 10. 10) 一言英文先生 (福岡大学) <http://kgu-caps.com/news/2894/>  
 第 38 回(2019. 11. 28) 松本敦先生 (関西福祉科学大学) <http://kgu-caps.com/news/2955/>  
 第 39 回(2020. 1. 9) 菅野康太先生 (鹿児島大学) <http://kgu-caps.com/news/2974/>  
 第 40 回(2020. 2. 27) 伊藤友一先生 (慶応義塾大学) <http://kgu-caps.com/news/3109/>

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

### 【 CAPS シンポジウム 】(令和 2 年 2 月現在 4 回開催済)

CAPS シンポジウム：戦略キックオフシンポジウム「幸せを探る：ポジティブ感情のメカニズム解明をめざして」(2016. 2. 12) <http://kgu-caps.com/news/311/>

CAPS シンポジウム「食行動やにおいに関わる感情 —nature-nurture 問題の新たな地平を探る」(2017. 3. 3) <http://kgu-caps.com/news/1074/>

CAPS シンポジウム「社会性と探索行動」(2019. 3. 1) <http://kgu-caps.com/news/2545/>

CAPS シンポジウム「感情を考える—理論から応用まで—」(2019. 10. 5)

<http://kgu-caps.com/news/2772/> 共催：日本感情心理学会 第 14 回 (2019 年度) セミナー

### 【 CAPS 講演会 】(令和 2 年 2 月現在 6 回開催済)

2016. 5. 16 柏木恵子先生 (東京女子大学名誉教授) <http://kgu-caps.com/news/634/>

2016. 6. 24 入戸野宏先生 (大阪大学) <http://kgu-caps.com/news/692/>

2017. 2. 20 廣中直行先生 (株式会社 LSI メディエンス 顧問) <http://kgu-caps.com/news/885/>

2017. 9. 9 Jonathon D. Crystal 先生 (Indiana University) <http://kgu-caps.com/news/1471/>

2017. 10. 23 川口潤先生 (名古屋大学) <http://kgu-caps.com/news/1533/>

2018. 3. 6 山崎勝之先生 (鳴門教育大学) <http://kgu-caps.com/news/1733/>

### 【 CAPS ワークショップ 】(令和 2 年 2 月現在 8 回開催済)

2017. 3. 14 竹内理人先生 (東京工業大学) <http://kgu-caps.com/news/1113/>

2017. 8. 2 Robin Orthey 先生 (福山大学・Maastricht University)・平伸二先生 (福山大学)  
<http://kgu-caps.com/news/1417/>

2018. 1. 27 津田裕之先生 (京都大学) <http://kgu-caps.com/news/1764/>

2018. 10. 31 木村元洋先生 (産業技術総合研究所) <http://kgu-caps.com/news/2330/>

第 1 回(2017. 8. 8) 井上雅勝先生 (武庫川女子大学) <http://kgu-caps.com/news/1393/>

第 2 回(2017. 12. 16) 紀ノ定保礼先生 (静岡理工科大学) <http://kgu-caps.com/news/1665/>

第 3 回(2018. 8. 23) 紀ノ定保礼先生 (静岡理工科大学) <http://kgu-caps.com/news/2168/>

第 4 回(2018. 8. 24) 井関龍太先生 (大正大学) <http://kgu-caps.com/news/2180/>

### 【 成果報告会 】(令和 2 年 3 月現在 5 回開催済)

2015 年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2016. 3. 4) <http://kgu-caps.com/news/466/>

2016 年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2017. 3. 3) <http://kgu-caps.com/news/868/>

2017 年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2018. 3. 6) <http://kgu-caps.com/news/1959/>

2018 年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2019. 3. 1) <http://kgu-caps.com/news/2543/>

2019 年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2020. 3. 2) <http://kgu-caps.com/news/3116/>

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

## 14 その他の研究成果等

### 【 受賞 】

大竹恵子 日本健康心理学会 2015 年度本明記念賞 受賞 (2015. 9)  
 光藤優花・小川洋和 日本認知心理学会第 13 回大会 優秀発表賞 受賞 (2016. 1)  
 金田亜里沙・大竹恵子 日本健康心理学会 2016 年度本明記念賞 受賞 (2016. 11)  
 井上和哉・大竹恵子 日本健康心理学会第 29 回大会優秀発表賞 受賞 (2016. 11)  
 白井理沙子・小川洋和 2016 年度日本社会心理学会若手研究者奨励賞 受賞 (2016. 12)  
 白井理沙子・小川洋和 2016 年度日本基礎心理学会優秀発表賞 受賞 (2017. 1)  
 小國龍治・大竹恵子 2017 年度日本健康心理学会アーリーキャリアヘルスサイコロジスト賞 受賞  
 (2017. 9)  
 道野栞・佐藤暢哉 関西心理学会第 128 回大会研究奨励賞 受賞 (2017. 1)  
 小林正法・真田原行・片山順一・大竹恵子 第 81 回日本心理学会大会学術大会優秀発表賞 受賞  
 (2017. 12)  
 小林正法・大竹恵子 日本健康心理学会大会第 31 回大会優秀発表賞 受賞 (2018. 6)  
 小林正法・上野泰治・川口潤 第 16 回日本認知心理学会優秀発表賞 (発表力評価部門) 受賞  
 (2018. 12)  
 松本敦・片山順一・尾島司朗・成瀬康・井原綾 第 82 回日本心理学会大会特別優秀発表賞 受賞  
 (2019. 9)  
 白井理沙子・小川洋和 関西心理学会第 131 回大会研究奨励賞 受賞 (2019. 12)  
 小林穂波・小川洋和 関西心理学会第 131 回大会研究奨励賞 受賞 (2019. 12)  
 小林穂波・小川洋和 日本基礎心理学会第 38 回大会優秀発表賞 受賞 (2020. 1)

### 【 科研費 】 研究代表者

片山順一 基盤研究 B (25285206) 2013-16 2,400,000 円  
 大竹恵子 基盤研究 C (15K04165) 2015-19 3,400,000 円  
 佐藤暢哉 基盤研究 C (15K01836) 2015-17 3,800,000 円  
 佐藤暢哉 新学術領域研究 (研究領域提案型) 公募研究 (26118514) 2014-15 6700,000 円  
 小川洋和 基盤研究 C (25380991) 2013-15 3,800,000 円  
 小野久江 基盤研究 C (25380965) 2013-15 3,800,000 円  
 中島定彦 基盤研究 C (15K04201) 2015-17 3,700,000 円  
 小野久江 基盤研究 C (16K04406) 2016-19 3,500,000 円  
 成田健一 挑戦的萌芽 (16K13478) 2016-19 2,500,000 円  
 佐藤暢哉 新学術領域研究 (研究領域提案型) 公募研究 (16H01490) 2016-17 6,800,000 円  
 佐藤暢哉 基盤研究 C (18K07357) 2018-20 3,400,000 円  
 中島定彦 基盤研究 C (18K03192) 2018-20 3,400,000 円  
 桂田恵美子 基盤研究 C (18K03125) 2018-20 2,500,000 円  
 小川洋和 基盤研究 C (18K03191) 2018-20 3,300,000 円  
 大竹恵子 基盤研究 B (19H01766) 2019-23 13,400,000 円

### 【 学外共同研究 】

片山順一 三菱電機株式会社 感情推定・細分化システム 2015 500,000 円 研究代表者  
 小野久江 日本イーライリリー株式会社 心理・教育関係者における双極性障害・うつ病・ADHD の認  
 知度と心理教育 2015-17 500,000 円 研究代表者  
 片山順一 公益財団法人 日本英語検定協会 (受) 脳波による英語学習評価の研究 2016



法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

300,000円 研究代表者

片山順一 国立研究開発法人情報通信研究機構・滋賀大学（共） 脳波を利用した英語力評価技術の研究開発 2016 0円 研究代表者

片山順一・大竹恵子 女性研究者研究活動支援事業（連携型） 主観的幸福感の見積もりと時間割引：事象関連脳電位を用いた日中比較研究 2016 200,000円 研究連携協力者

片山順一 国立研究開発法人情報通信研究機構・横浜国立大学・日本英語検定協会・株式会社 JSOL・株式会社エヌ・ティー・ティー・データ経営研究所（共） 脳波を利用した英語習熟度評価技術の研究開発 2017-19 1,500,000円 研究代表者

大竹恵子 女性研究者研究活動支援事業（連携型） 健常高齢者における記憶に対する自己評価と精神的健康度との関連 2017 0円 研究連携協力者

小野久江 日本イーライリリー株式会社 心理・教育関係者を対象としたうつ病・ADHD の薬物療法理解の早期教育プログラム実施とその評価 2015-17 500,000円（3年間の総額）研究代表者

桂田恵美子 日本生命財団 乳幼児の愛着パターンと適応一問題行動や向社会的行動に焦点を当てて一 2017-18 1,000,000円 研究代表者

片山順一 パナソニック（株）エコソリューションズ社（共） EFRP を用いた、住空間デザインの注意評価に関する研究 2018-19 3,000,000円 研究代表者

片山順一 株式会社マンダム（共） 冷温感や香りがポジティブな感情に及ぼす影響 2018-19 3,000,000円 研究代表者

佐藤暢哉 京都大学霊長類研究所共同利用・共同研究 コモンマーモセットにおける空間認知 2016-19 457,000円 研究代表者

桂田恵美子 日本生命財団 乳幼児の愛着パターンと適応一問題行動や向社会的行動に焦点を当てて一 2017-18 1,000,000円 研究代表者

片山順一 ロート製薬株式会社（共） 脳波を指標とした、点眼剤による清涼感に関する検討 2019-20 1,500,000円 研究代表者

### 【 特許 】

発明者：松本敦、井原綾、成瀬康、尾島司郎、片山順一

発明の名称：脳活動を利用した語学能力評価装置、及び語学能力評価システム

出願番号：特願 2018-011431 出願日：2018年1月26日

発明者：鈴木聡、片山順一

発明の名称：共感度評価システム、共感度評価方法及びプログラム

出願番号：特願 2019-211827 出願日：2019年11月22日

### 【 報道 】

佐藤暢哉による、2015年の Animal Cognition 誌に掲載された論文“Rats demonstrate helping behavior toward a soaked conspecific”が以下の数のメディア（日本国内メディア：7件、海外メディア：58件）で報道された。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

## 15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

### <「選定時」に付された留意事項>

該当なし

### <「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし

### <「中間評価時」に付された留意事項>

1. **社会貢献について**：社会や地域への研究成果の公開や情報発信までは、これまでは行われてこなかったようであるため、今後はそのような活動も取り入れてもらいたい。

2. **研究プロジェクトの進捗状況・研究成果について**：学术论文の本数が6本とそれほど多くはないため、本研究テーマに関する雑誌論文数が増えていくことを期待したい。大きなサブテーマである(2)に関する研究成果が十分ではない面が否めない。

3. **研究者養成について**：「本プロジェクトの目的に研究者養成は含まれていない」とあるように、本プロジェクトが研究者養成を強調したプロジェクトとはなっていないことから、研究者養成という点での評価が十分ではない面がある。大学院生等が本研究プロジェクトにおいて、どのような具体的な貢献をしているのか明確にされていない部分があるので、今後その点を明確にすることを期待する。

### <「中間評価時」に付された留意事項への対応>

1. 社会や地域といった一般の方々への研究知見の還元および社会貢献については、心理学が果たすべき社会への応用・貢献という意味でも極めて重要な最終目標だと位置づけている。しかしながら一方で、心理学という領域・テーマ内容であるがゆえに、安易な解釈や情報伝達にならないように研究知見の開示内容や伝え方等には、慎重になるべきだとも考えている。そこで本プロジェクトでは、地域社会への公開講演やチラシによる情報伝達といった形での広報活動は適していないと判断し、科学的な知見を適切に公表できるという点で、学会との共催という形でのシンポジウムを企画したり、地域社会への研究知見の伝達という意味では、研究対象として今回かかわっていただいた方々（例えば、幼児やその保護者、小学生や学校関係者等）に研究知見に関する情報を公表し、実社会への貢献という形で対応を工夫した。

2. サブテーマの(2)については、プロジェクト全体として(1)の研究を受けての展開という位置づけであり、プロジェクトの後半に比重を置いて研究を実施した。本研究期間を通算した研究成果としては、論文80本、図書12冊、学会発表264件となり、本研究課題の中心的な論文も18本と増えた。現在、投稿中の論文も多く存在しているため、今後、これらの論文が採択となり、確実な成果となるように引き続き、努力する予定である。

3. 研究者養成については、本プロジェクトの中心的な目的ではないと位置づけているが、言うまでもなく、大学院生等への研究教育活動の一環として本プロジェクトは展開してきた。本プロジェクトにおける院生の関わりや研究展開及び成果については、研究業績を参照いただければ明白だと思うが、研究成果の副次的効果でも記載したように本プロジェクトは、個々の院生への研究活動を支援してただけではなく、月に1回のペースで通算40回開催してきた研究会やワークショップ、講演会、シンポジウム等の企画と実施は、大学院生等に対して学際的で専門的な知的好奇心を刺激する機会を提供することにつながり、本学の大学院生の研究の活性化と研究業績の向上に大きく貢献した。その成果として、本プロジェクトの期間中、計15名の博士学位取得者、計39名の修士学位取得者を送り出すことにつながったと考えている。また、本プロジェクトで採用した博士研究員のうち1名は2019年に国立大学の准教授として着任し、別の1名は現在、日本学術振興会特別研究員(PD)として本学にて研究を継続展開している。さらに、2019年度には、国外からの博士研究員を1名採用している。以上の点から、本プロジェクトの期間中、研究成果の公表を含めた研究交流の場を提供してきたことは、研究施設の設立という意味だけではなく、研究者養成という点においても多大な貢献ができたのではないかと考えている。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他( )	
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	34,940	11,648	23,292				
	研究費	38,431	19,772	18,659				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	31,932	10,645	21,287				
	研究費	36,587	20,602	15,985				
平成29年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	36,949	20,570	16,379				
平成30年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	36,679	20,029	16,650				
令和元年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	34,686	19,025	15,661				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	66,872	22,293	44,579	0	0	0	0
	研究費	183,332	99,998	83,334	0	0	0	0
総計	250,204	122,291	127,913	0	0	0	0	

17

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
応用心理科学研究センター	H22	601m <sup>2</sup>	16	18			
F号館心理科学研究室	H9	1,168m <sup>2</sup>	43	40			
ハミル館	H14	451m <sup>2</sup>	19	18			

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m<sup>2</sup>

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)							
(研究設備)							
ポジティブ感情喚起システム	2015	PKKS-DA01	1式	3580 h	9,998	6,665	私学助成
眼球運動解析システム	2015	RED500VP-SYS	1式	2550 h	9,992	6,661	私学助成
ニューロン活動記録・解析システム	2015	PHTP-1000	1式	4950 h	14,949	9,966	私学助成
行動記録解析システム	2016	KKKS-DA02	1式	2880 h	6,998	4,665	私学助成
眼球運動-脳波連動解析システム	2016	ETGVP-SYS	1式	2040 h	14,997	9,998	私学助成
微量生体試料分析システム	2016	HTEC-500ACGP	1式	1530 h	9,936	6,624	私学助成
アクティブ電極脳波計測システム	2015	actiCHamp-SYS	1式	2670 h	4,996		
ソーシャルメディア実験システム	2015	SMES-001	1式	1148 h	4,908		
生体信号計測システム	2016	MaP2310SYS	1式	3768 h	4,897		
ラット情動状態測定システム	2016	RDEK	1式	1099 h	4,698		
正立顕微鏡イメージングシステム	2017	AIM2FLBFAPO-503C-NIS-1	1式	1755 h	4,989		
情動状態評価システム	2017	BP-BA_ExG-SYS	1式	2180 h	4,999		
多面的情動観測解析システム	2018	EyeSignal-01	1式	760 h	4,923		
神経活動計測システム	2018	Plexon/Vpixx	1式	2220 h	4,992		
対人情動評価システム	2019	MaP2757SYS	1式	369 h	4,996		
マルチチャンネル電気生理学システム	2019	UM-MCH32-OA	1式	280 h	4,999		
(情報処理関係設備)							

法人番号	281004
------	--------

## 18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 27 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	11,870	実験用消耗品	11,870	実験用パソコン、実験用消耗品他
光 熱 水 費	4,330	光熱水費	4,330	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	8	郵送料	8	調査用紙他郵送料
印 刷 製 本 費	293	印刷製本費	293	調査用紙他印刷代
旅 費 交 通 費	147	研究旅費	147	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	5,554	報酬料金・委託料	5,554	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料他
( 消 耗 図 書 費 )	4,172	雑誌代	4,172	洋雑誌、和雑誌他
( 賃 借 料 )	493	印刷機リース代	493	印刷機リース代
( 保 守 ・ 修 繕 料 )	290	保守・修繕費	290	印刷機保守料、実験機器修理代
計	27,157		27,157	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	11,274	教育研究用機器備品	11,274	実験用設備、パソコン他
図 書				
計	11,274		11,274	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	2,800		2,800	学内4人
ポスト・ドクター	0		0	
研究支援推進経費	0		0	
計	2,800		2,800	学内4人

年 度	平成 28 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	9,888	実験用消耗品	9,888	実験用消耗品、実験機器他
光 熱 水 費	4,434	光熱水費	4,434	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	16	郵送料	16	調査用紙他郵送料
印 刷 製 本 費	0		0	
旅 費 交 通 費	897	研究旅費	897	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	5,718	報酬料金・委託料	5,718	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料、講演料他
( 消 耗 図 書 費 )	3,245	雑誌代	3,245	洋雑誌、和雑誌他
( 賃 借 料 )	541	印刷機リース代	541	印刷機リース代
( 保 守 ・ 修 繕 料 )	389	保守・修繕費	389	実験機器修理・保守代
計	25,128		25,128	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	11,459	教育研究用機器備品	11,459	実験用設備、パソコン他
図 書				
計	11,459		11,459	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	2,400		2,400	学内2人
ポスト・ドクター	11,208		11,208	学外3人(うち2名は2016年4月より非常勤講師 に登用)
研究支援推進経費				
計	13,608		13,608	学内2人、学外3人

法人番号	281004
------	--------

年 度	平成 29 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	8,187	実験用消耗品	8,187	実験用消耗品、実験機器他
光 熱 水 費	4,101	光熱水費	4,101	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	0		0	
印 刷 製 本 費	0		0	
旅 費 交 通 費	1,670	研究旅費	1,670	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	7,016	報酬料金・委託料	7,016	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料、講演料他
( 消 耗 図 書 費 )	2,981	雑誌・図書代	2,981	洋雑誌、和雑誌他
( 賃 借 料 )	893	印刷機リース代	893	印刷機リース代
( 修 繕 料 )	8	修繕料	8	実験機器修理代
計	24,856		24,856	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	12,093	教育研究用機器備品	12,093	実験用設備、パソコン他
図 書				
計	12,093		12,093	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	4,800		4,800	学内4人
ポスト・ドクター	13,008		13,008	学外3人(うち2名は2016年4月より、1名は2017年4月より、非常勤講師に登用)
研究支援推進経費				
計	17,808		17,808	学内4人、学外3人

年 度	平成 30 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	8,927	実験用消耗品	8,927	実験用消耗品、実験機器他
光 熱 水 費	4,278	光熱水費	4,278	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	112	郵送料	112	実験動物輸送代他
印 刷 製 本 費	0		0	
旅 費 交 通 費	728	研究旅費	728	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	6,913	報酬料金・委託料	6,913	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料、講演料他
( 消 耗 図 書 費 )	3,367	雑誌・図書代	3,367	洋雑誌、和雑誌他
( 賃 借 料 )	1,078	印刷機リース代	1,078	印刷機リース代
計	25,403		25,403	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	11,276	教育研究用機器備品	11,276	実験用設備、パソコン他
図 書				
計	11,276		11,276	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	3,600		3,600	学内3人
ポスト・ドクター	12,474		12,474	学外3人(うち2名は2016年4月より、1名は2017年4月より、非常勤講師に登用)
研究支援推進経費				
計	16,074		16,074	学内3人、学外3人

法人番号	281004
------	--------

年 度	令和 元 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	7,846	実験用消耗品	7,846	実験用消耗品、実験機器他
光 熱 水 費	4,649	光熱水費	4,649	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	4	郵送料	4	報告書等他郵送料
印 刷 製 本 費	0	印刷製本費	0	
旅 費 交 通 費	289	研究旅費	289	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	7,318	報酬料金・委託料	7,318	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料、講演料他
( 消 耗 図 書 費 )	3,122	雑誌・図書代	3,122	洋雑誌、和雑誌他
( 賃 借 料 )	1,078	印刷機リース代	1,078	印刷機リース代
( 修 繕 料 )	88	修繕料	88	実験機器修理費
計	24,394		24,394	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 ( 兼 務 職 員 )	0		0	
教 育 研 究 経 費 支 出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 ( 1 個 又 は 1 組 の 価 格 が 5 0 0 万 円 未 満 の も の )				
教 育 研 究 用 機 器 備 品	10,292	教育研究用機器備品	10,292	実験用設備、機器
図 書				
計	10,292		10,292	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	3,600		3,600	学内3人
ポスト・ドクター	9,072		9,072	学外1人(2016年4月より、非常勤講師に登用)
研究支援推進経費				外国1人
計	12,672		12,672	学内3人、学外1人、外国1人

平成27(2015)年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る中間評価票

2018年 5月 22日

中間評価委員

選定年度 (研究期間)	2015年度 (2015~2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価> 研究進捗状況報告書、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
本研究プロジェクトは、設立時から文学研究科の10名と学外の3名、計13名によって運営されてきた。研究施設は西宮上ヶ原キャンパスの応用心理科学研究センター、F号館心理科学研究室、ハミル館の3カ所を使用してきた。研究設備は応用心理科学研究センター、F号館心理科学研究室に設置され、使用時間や使用者数の点で適切に運用されてきたことが「研究進捗状況報告書の概要」から読み取れる。			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
博士研究員PDが3名、大学院生RAが4名、大学院生48名が研究活動に参加したという記録から、若手研究者を養成している点が見える。具体的には週1回のミーティングにより、相互に進捗状況や研究に関する知見について、意見交換が行われてきた点も明らかにされている。			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
「研究進捗状況報告書の概要」に明示されている通り、研究プロジェクトの構成員による業績が多数、公表されている点、インターネットを通して公開している点、講演会・ワークショップを度々、開催してきた点から、一定の社会貢献を果たしてきたと判断できる。			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
「研究進捗状況報告書の概要」において、情動メカニズムの解明とコミュニケーション過程での感情の役割について専門的な観点から段階的に研究を進めてきたことが理解できる。研究代表者から2018年5月10日に提出された「戦略的研究基盤形成支援事業 中間自己評価票」に記載されている通り、本研究は研究体制という点からは「当初の計画通り、まったく問題なく進捗している」と判断しているが、それは妥当とみなすことができる。			
5 その他(選定時「留意事項」への対応状況等)			
「戦略的研究基盤形成支援事業 中間自己評価票」の研究者養成に関する項目では、「あまり積極的ではないが要請を行っている」が選択されている。今後、「非常に積極的に養成を行っている」、というレベルに到達することが望まれる。			
6 総合所見 (A・B・Cの三段階評価と所見)			
<p style="text-align: center;">(A)・B・C)</p> <p>A: 着実な進捗が見られる    B: 進捗は見られるが、改善すべき点がある、 C: 進捗があまり見られない</p>			
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>「研究進捗状況報告書の概要」において、研究プロジェクトに関する全体像が詳細に記述されており、体系的な研究が実施されてきた点が見える。2018年3月に出された2名の中間評価委員による中間評価票では、総合所見が「A」と「B」に分かれている。評価委員の一人が指摘している通り、「情動メカニズムの解明で行われている6研究とコミュニケーション過程での感情の役割に関する3研究の位置づけ、相互関連性がわかりやすく説明されると、本プロジェクトの意義がさらに明らかになる」、という点から今後の研究の発展が期待できる。</p>			



2018年 5月 23日

中間評価委員

選定年度 (研究期間)	2015年度 (2015~2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価>研究進捗状況報告書、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
本研究は、本学文学部心理学科の教員9名を中心に、3名の学外研究者、PD3名、RA4名などから組織された研究体制のもと、2つのサブテーマを研究を進めながら、情動概念の再構築というメインテーマを目指して研究拠点の形成を図ってきている。活発な研究活動、それに伴う研究設備の活用が図られ、研究アウトプットが出されてきた様子が窺われ、まさに研究拠点として機能してきたと評価できる。			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
本研究プロジェクトの目的に研究者養成が含まれていないものの、PD3名、RA4名、さらに48名の大学院生が関わってきたことで、一定の貢献をしてきたとの自己評価がなされている。多くの若手研究者が研究に、また研究会なども参加する機会があることから、研究者養成という視点をより意識してプロジェクトの運営をしてもらえばより成果が上がったと思われる。後半の研究期間ではそのことを意識してもらいたい。			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
これまで25回の研究会、5回の講演会、2回のシンポジウム、5回のワークショップなど、活発な研究成果の公表が行われてきている。社会や地域への研究成果の公開や情報発信までは、これまで行われてこなかったようである。今後はそのような活動も取り入れてもらいたい。			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
過去の研究が継続がベースにあるとは言え、国内外の雑誌論文や学会発表を通じた研究成果は多数あり、研究は順調に進んでいることが窺われる。ただし、各研究メンバーが個々に行っている研究が基本であり、2つのサブテーマのもとにそれらがどう体系化され、それがメインテーマの概念再構築にどう結びついていくのかが、理解しにくい。残された期間ではそうした面も意識して研究を遂行してもらいたい。			
5 その他(選定時「留意事項」への対応状況等)	特に無し。		
6 総合所見 (A・B・Cの三段階評価と所見)			
(A)・B・C)			
A:着実な進捗が見られる B:進捗は見られるが、改善すべき点がある、 C:進捗があまり見られない			
<所見> 研究は概ね計画通りに進捗し、活発な研究成果をもたらしていると評価できる。研究成果の情報発信や社会還元、若手研究者養成と研究との関係をより意識すること、研究者の個別研究と全体テーマとの体系化など、課題・改善点はいくつかあるものの、ここまでの研究活動と成果に関しては高く評価することができよう。残された期間での改善を期待したい。			

選定年度 (研究期間)	2015年度 (2015~2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<b>&lt;評価&gt;研究進捗状況報告書、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。</b>			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
<p>本研究プロジェクトの研究体制についてであるが、研究組織は学内外の13名の研究者によって構成されており、各研究者の研究課題と役割は明示されている。ただし、各研究者の研究課題や役割と2つの大きなサブテーマとの関わりが明確ではない面もある。学術論文への投稿や学会発表、ワークショップ、講演会など多数の研究成果が報告されており、研究拠点を形成するという観点からみると、プロジェクトが研究目的に従って遂行されていると評価できる。研究者間の調整・連携については、研究進捗状況報告書だけでは十分に評価できないところがある。競争的な外部資金を積極的に獲得している点、学内に3カ所ある研究施設と設備があり、研究支援体制、活用の実態から、心理学におけるポジティブ情動のメカニズムや社会的役割の解明という先駆的な研究課題に関して、今後研究拠点到に相応しい研究活動が行われると期待される。</p>			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
<p>博士研究員PDが3名、大学院生RAが4名、大学院生が48名の合計55名の若手研究者が本プロジェクトに関わり、研究活動を行っている。研究者養成という点では、これらの大学院生等の参加数とその研究活動を勘案すると、今後の研究者養成については大いに期待することができる。ただし、中間自己評価においては、コメント欄に「本プロジェクトの目的に研究者養成は含まれていない」とあるように、本プロジェクトが研究者養成を強調したプロジェクトとはなっていないことから、研究者養成という点での評価が十分でない面がある。研究進捗状況報告書を見ると、大学院生等がどのような本研究プロジェクトにおいて、どのような具体的な貢献をしているのか明確にされていない部分があるので、今後その点を明確にすることを期待する。</p>			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
<p>2015年度から2017年度までの3年間の間に、本研究チーム全体で雑誌論文58本(そのうち研究成果に対応するものは6本)、図書8冊、学会発表134本という研究成果をあげており、研究成果の公開状況としては、研究会が25回、講演会が5回、ワークショップが5回、成果報告会が2回開催されており、これらが定期的実施されていることを鑑みると、社会に大きく貢献していると評価することができる。ただし、雑誌論文58本のうち、本研究テーマに関するものが6本とそれほど多くはなく、各研究者の個別の研究成果が中心となっていることから、今後は、本研究テーマに関する雑誌論文数が増えていくことを期待したい。</p>			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
<p>特に優れた研究成果として、大きなサブテーマの一つであるポジティブ情動の機能や生起に着目した研究の成果7点があげられ、それらがいずれも雑誌論文あるいは学会発表として公表されている点は大きい評価できる。ただし、報告書を見ると、コミュニケーション過程での情動の役割の解明という2つのサブテーマに関する研究成果が十分ではない面が否めない。さらに、134本ある学会発表のうち、本研究テーマに対応したものが1本と非常に少ないので、今後、本研究テーマに基づいた学会発表が増えることを期待したい。</p>			
5 その他(選定時「留意事項」への対応状況等)	特になし。		
6 総合所見 (A・B・Cの三段階評価と所見)	<p>( A ・ <b>B</b> ・ C )</p> <p>A: 着実な進捗が見られる B: 進捗は見られるが、改善すべき点がある、 C: 進捗があまり見られない</p> <p><b>&lt;所見&gt;</b>                  ポジティブ情動の機能や生起、さらにコミュニケーション過程での情動の役割という2つの大きなサブテーマに基づき、13人からなる研究者チームと数多くの大学院生等で構成されている研究組織において、これまで本研究テーマに積極的に研究活動を行ってきており、さらに学会誌への投稿、学会発表、研究会、講演会等に精力的に取り組んでいる点は高く評価することができる。ポジティブ情動に関して基礎研究から応用研究へとつなげようとする本研究プロジェクトの独創性とその結果による波及効果については研究の可能性という点からも高く評価することができる。また、これまで数多くの研究成果が公表されており、社会に大きく貢献しているところも評価できる。ただし、今後、本研究テーマに直接関連する研究成果が増えることを課題とした。いずれにせよ、本研究プロジェクトの更なる発展を期待したい。</p>		

平成27（2015）年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価票

2020年 5月 25日

事後評価委員

選定年度 (研究期間)	平成27年度 (2015～2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価>研究成果概要、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
本研究プロジェクトは、設立当初から文学研究科のメンバーが中心となり遂行されてきた。最終年度は学内9名と学外の3名、計12名によって運営されていた。 研究施設は西宮上ヶ原キャンパスの応用心理科学研究センター、F号館心理科学研究室、ハミル館の3カ所を使用してきた。 研究設備は応用心理科学研究センター、F号館心理科学研究室に設置され、使用時間や使用者数の点で適切に運用されてきたことが「研究成果報告書概要」から読み取れる。			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
博士研究員PD は2名（期間中4名）、大学院生RA は3名（期間中8名）、大学院生40名（期間中98名）が研究活動に参加したという記録から、若手研究者を養成している点が見える。具体的には週1回のミーティングにより、最新の国内外の知見を積極的に共有するなど密に情報交換を行い、応用研究の担当者との連携も強化してきた点も明らかにされている。 期間中に15名の博士、計39名の修士学位取得者を送り出している。博士研究員の1名は2019年に国立大学准教授に着任し、別の1名は日本学術振興会特別研究員(PD)となり研究を継続している。以上の点から、本研究が多数の研究者を養成する機会を作っていたものと理解できる。			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
「研究進捗状況報告書の概要」に明示されている通り、研究プロジェクトの構成員による業績が多数、公表されている点、インターネットを通して公開している点、講演会・ワークショップを度々、開催してきた点から、一定の社会貢献を果たしてきたと判断できる。 更に産業界との連携として、研究代表者が期間中に民間企業6社との学外共同研究を行ってきた。また犯罪の科学捜査への還元として、2019年12月18日に博士研究員のRobin Orthey が学部生3名と共に奈良県警察本部科学捜査研究所を訪問し、心理生理学技術の犯罪捜査への応用について意見交換を行った点も特筆に値する。			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
「研究成果報告書概要」において、「情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦」というテーマの下で感情の役割について専門的な観点から段階的に研究を進めてきたことが理解できる。 12名が結束力のある研究を進めてきた点と多数の大学院生を養成してきた点から、本研究チームはプロジェクトとしての機能を十分に発揮したと言える。 研究代表者から2020年4月16日に提出された「戦略的研究基盤形成支援事業 事後自己評価票」に記載されている通り、本研究は研究体制という点からは「全く問題なくプロジェクトを遂行できた」と評価しているが、それは妥当とみなすことができる。			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）	研究代表者は2018年と2019年に、それぞれ以下の特許出願を実現している。 「脳活動を利用した語学能力評価装置、および語学能力評価システム」 「共感度評価システム、共感度評価方法およびプログラム」 これらは異なる研究メンバーとの成果であるが、本プロジェクトとの間接的な成果であったと推測できる。		
6 総合所見（A・B・Cの三段階評価と所見）	<p>(A)・B・C)</p> <p>A:優れた研究成果を上げている B:研究成果は上がっている C:あまり研究成果が上がっていない</p> <p>&lt;所見&gt; 「研究進捗状況報告書の概要」において、研究プロジェクトに関する全体像が詳細に記述されており、体系的な研究が順調に実施されてきた点が見取れる。 2020年3月に出された2名の評価委員による事後評価票では、両者の総合所見が「A」であった。 評価委員が所見欄で「…国際誌を含む80本もの論文業績として結実している」、「…心理学研究の範として位置づけられるに違いない」、と明らかにしている点からも本研究が戦略的研究基盤プロジェクトとして大きな成果をあげたと認められる。</p>		

平成27（2015）年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価票

2020年 5月 25日

事後評価委員

選定年度 (研究期間)	平成27年度 (2015～2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<b>&lt;評価&gt;研究成果概要、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。</b>			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
<p>本研究は、本学文学部心理学科の教員10名、学外研究者3名、その中のコアメンバー3名が中心となり、博士研究員PD4名（期間中）、大学院生RA8名（期間中）も巻き込みながら、研究体制が組織されてきた。情動概念の再構築というメインテーマのもと2つのサブテーマを掲げ、研究発表・研究交流の場も活発に設けられ、研究成果の増加と研究拠pointsの形成につながってきたと評価できる。このプロジェクト下で用意された研究設備も積極活用され、研究推進に役立てられてきたことが窺われる。</p>			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
<p>本研究プロジェクトでは、期間全体を通して、博士研究員PD4名、大学院生RA8名、その他の大学院生90名が、それぞれに研究に参画する機会が与えられ、心理学教育の拠点としても重要な貢献をしてきたと評価できる。内外の研究者との研究交流の場としての研究会が、期間を通して年8回程度継続開催されており、多くの若手研究者にとって重要な教育の場になってきたと言える。博士学位取得者15名、修士学位取得者39名という点も重要な貢献である。</p>			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
<p>期間を通して研究会40回に加え、講演会6回、シンポジウム4回、ワークショップ8回、成果報告会5回、HPを通じた情報提供など、活発な研究成果の公表が意図されてきた。研究交流という点では成果・貢献があったと評価できるが、社会や地域への研究成果の公開や情報発信という点で、より具体的な試みや成果があれば望ましかった。</p>			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
<p>期間を通して、国内外の雑誌論文80本、図書12本、学会発表264本と多数の研究成果があり、それは受賞15本、外部研究費獲得15本、特許取得等に現れており、大いに評価することができる。メインテーマが2つのサブテーマに分かれ、それがさらに9つと6つの個別テーマへと研究全体が体系化されて研究プロジェクトが進められてきた。その結果として、それぞれの成果がメインテーマである情動概念の再構築に最終的にどうつながっていくかが分かりにくかったが、それに向けてさらなる研究の継続と成果を期待したい。</p>			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）	特に無し。		
6 総合所見（A・B・Cの三段階評価と所見）	<p>( <b>A</b> ・ B ・ C )</p> <p>A:優れた研究成果を上げている B:研究成果は上がっている C:あまり研究成果が上がっていない</p>		
<p><b>&lt;所見&gt;</b>          本研究プロジェクトは概ね計画通りに進捗し、活発な研究成果と研究・教育の両面で貢献をしてきたと評価できる。研究成果の情報発信や社会還元、博士研究員や博士号取得者が若手研究者として自立していく目標、各研究者や個別研究テーマと全体テーマとの体系化など、課題はいくつかあるものの、これまでの研究活動と成果を今後さらに膨らませ、安全・安心な社会や幸せな生活環境の創造という最終目標への研究貢献へと発展していくことを期待したい。</p>			

平成27（2015）年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価票

2020年 5月 25日

事後評価委員

選定年度 (研究期間)	平成27年度 (2015～2019)	研究代表者	文学研究科 片山 順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<b>&lt;評価&gt;研究成果概要、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。</b>			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
研究体制は、代表者1名と参加研究者11名（学内8名、学外3名）の計12名からなる。いずれも上述の目的を達成するための研究に従事するが、主に本研究プロジェクトのコアメンバーとして研究を推進し、基盤的知見を蓄積する研究を担う者が3名、それらの知見を踏まえて応用研究を担うものが9名という体制である。博士研究員PDは2名（2020年2月末時点；期間中4名）、大学院生RAは3名（同；期間中8名）、大学院生40名（同；期間中98名）が活発に研究活動を行っている。十分な研究体制が整えられており、特に問題がないと評価する。			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
自己評価表に記述してある通り、研究者養成は、本研究の中心的な目的ではないとのことである。それでも15名の博士学位取得者、39名の修士学位取得者を送り出し、その中でも大学教員やPDを排出しているという点はそれなりに評価できる。			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
研究会やワークショップなどを定期的を開催してきており、それなりの評価することができる。			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等は、研究成果報告書にあるように、論文、学会発表、ワークショップなど多数が報告されている。評価できるところである。			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）	該当せず		
6 総合所見（A・B・Cの三段階評価と所見）	A・B・C		
<p>A:優れた研究成果を上げている B:研究成果は上がっている C:あまり研究成果が上がっていない</p> <p><b>○ A</b> ・ B ・ C )</p> <p>&lt;所見&gt; A.研究成果報告書を見る限り、数多くの論文、図書、学会発表などの成果を上げており、大いに評価することができる。研究者養成の点でもう少し積極的に取り組んでいればもっとよかったと思われる。</p>			

平成27（2015）年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る中間評価票

2018年 3月 8日

中間評価委員

選定年度 (研究期間)	2015度 (2015～2019)	研究代表者	文学研究科 片山順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価>研究進捗状況報告書をもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
<p>ポジティブ情動のメカニズムと社会的役割を解明するために、2つのサブテーマのもと、基礎から応用までの多角的な研究が推進されている。しかし、プロジェクト参加者のテーマと全体の目的の関係がやや曖昧であると思われる。ポジティブ情動の全体像を解明する上で、必要十分なサブテーマ構成となっているかについては俯瞰的な視点からの検討が課題であろう。さらに包括的な検討が行われるよう、今後の展開を期待したい。</p> <p>これまでの成果を見ると、個々の教員の研究が基本で、プロジェクト参加者間の有機的な連携については今後の課題だと思われる。研究設備については、ポジティブ感情の基礎研究を行う上で必要なものが導入されており、また活用頻度も高いことから、今後研究がさらに進展するものと期待できる。</p>			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
<p>現在博士研究員PD3名、RA4名、大学院生48名が研究に関わっている。これら研究員や学生がポジティブ感情研究に関与していることから、さらに研究が進展するものと期待できる。研究会や講演会も活発に行われていることから、研究者養成にも寄与している。研究会等へ大学院生や若手研究者を参加させるだけでなく、積極的に発表させることで研究実績を積むような機会を設けていただきたい。</p>			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
<p>これまでに25回の研究会、5回の講演会のほか、シンポジウムやワークショップ、成果発表会を積極的に開催している点は評価できる。これらの会には多数の参加者があるということであるが、どの程度の参加者があったのかの概数でも示されていると良いと思う。特に研究者養成の点から大学院生や若手研究者の参加状況は、大切なエビデンスになりうる。また、学外者の参加の程度も、本プロジェクトを学外に周知し、社会貢献に寄与する観点から重要なエビデンスになると思われるので、示しておくが良い。</p>			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
<p>これまで短期間でありながら、数多くの学術論文、図書、学会発表等が行われている点については、高く評価できる。本プロジェクトを開始する前から、関連するテーマでの研究がなされ、本プロジェクトを推進する上での準備がなされていたことがわかる。ただ、発表成果の中には、ポジティブ感情のメカニズムや社会的役割の解明とは直接関係のないものも含まれており、どの程度まで研究を広げるのかについても検討された方が良いと思われる。</p>			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）			
<p>複合感情としてノスタルジアを取り上げたのは興味深い、特殊な印象も受ける。他にも複合感情はあると思われるので、それらを検討の俎上に上げ、複合感情間の比較を行うことも課題と言える。</p> <p>情動メカニズムの解明で行われている6研究とコミュニケーション過程での感情の役割に関する3研究の位置付け、相互の関連性がわかりやすく説明されると、本プロジェクトの意義がさらに明らかになると思う。</p>			
6 総合所見（A・B・Cの三段階評価と所見）			
<p>( A ・ <b>B</b> ・ C )</p> <p>A: 着実な進捗が見られる B: 進捗は見られるが、改善すべき点がある、 C: 進捗があまり見られない</p>			
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>ポジティブ感情の機能や生起メカニズムの解明とコミュニケーション過程における役割を明らかにしようとしているのは、着眼点の面白さやその学問的意義の点で高く評価できる。テーマを大きく2つに分け、さらに9研究を進めており、基礎から応用へと広範にポジティブ感情を検討しようとする体系的な研究として貴重なプロジェクトである。これまで数多くの研究成果が公表され、研究会やシンポジウム等も積極的に開催していることから、十分な成果を上げている。今後は、ポジティブ感情解明における各研究テーマの位置付けと相互関連性を明確にするとともに、プロジェクトの目的に即し各研究をさらに焦点化することが求められる。</p>			

2018年 3月 17日

中間評価委員

選定年度 (研究期間)	2015度 (2015~2019)	研究代表者	文学研究科 片山順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価>研究進捗状況報告書をもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト運行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
<p>本プロジェクトは、関西学院大学応用心理科学研究センターを研究拠点に、国内外の心理科学の専門家13名を中心に組織化され、情動概念の再構築という目的達成に向けて順調に遂行されている。同大学院生や博士研究員PDなどもメンバー（総勢約50名）として加わり、基礎と応用を担う研究チームが情報を共有しながら連携して、センターの現有資源を最大限に活用した研究活動が展開されている。競争的な外部資金を獲得し、学内の研究支援体制も十分であることより、先導的な心理科学の研究拠点に相応しい体制が確立していると目される。</p>			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
<p>本プロジェクトには、関西学院大学応用心理科学研究センターを研究拠点にして、博士研究員PD3名、同大学の大学院生RA4名（同期間中のべ6名）及び大学院生48名（同期間中のべ68名）がメンバーとして参加している。プロジェクトのコアメンバーの主導の許、これら若手研究者が基礎と応用テーマを担う研究チームの一員として、情動概念の再構築という先端的な研究にコミットメントできる機会は研究者養成という観点から貴重と考える。</p>			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
<p>情動は心理学における古くて新しいテーマである。とくに近年、ポジティブ情動が注目されるようになり、概念の再構築が求められている。このようなニーズに応じて、月1回のペースで国内外の有識者を招いての研究会や講演会、シンポジウム、ワークショップなどを開催することで、得られた最新の科学的知見を広く心理学ワールドのみならず地域に社会還元していること、教育・臨床現場や産業界と連携した協力体制の構築を試みていることなどから、本プロジェクトの社会的波及効果はハイインパクトと考える。</p>			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
<p>ポジティブ情動に着目しながら情動の機能と社会的役割について、多面的かつ階層的にアプローチすることで情動概念を再構築しようとするresearch questionは、2つのサブテーマ（情動メカニズムの解明とコミュニケーション過程における情動の役割の解明）に落とし込まれて検討されている。研究計画のタイムラインに従って、本プロジェクトは順調に進行していると考えられる。このことは、多数の研究知見が数多くの国内外の学会において発表されたり、国内外の専門雑誌に論文として掲載されている成果からも明らかである。今後、これらの知見を統合することで、感性工学にも応用可能な情動評価システムが構築されることを期待する。</p>			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）	該当なし		
6 総合所見（A・B・Cの三段階評価と所見）	<p>( <b>A</b> ) ・ B ・ C )</p> <p>A: 着実な進捗が見られる    B: 進捗は見られるが、改善すべき点がある、 C: 進捗があまり見られない</p>		
<p>&lt;所見&gt; 情動の機能と役割についての解明を目指す基礎研究と、個人や社会が求めるウェルビーイングのための社会実装を目指す応用実践研究を包摂した本プロジェクトは貴重である。用意周到に練られた研究計画は具体的であり、研究チームの卓越した研究能力と高いレベルの研究資源を基盤にして、順当にこれまで研究成果を積み上げている。幸せな生活環境の創造と社会の実現に向けた研究拠点としてのさらなる活動の展開を期待して、上記の評価とした。</p>			

平成27 (2015) 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価票

2020年 3月 2日

事後評価委員

選定年度 (研究期間)	2015年度 (2015 ~2019 )	研究代表者	文学研究科 片山順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価>研究成果概要、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
本プロジェクトは学内8名、学外3名（うち1名は感情研究において国際的に著名な海外研究者）の12名の国際的にも最先端レベルの心理学研究者から構成され、それらメンバーの専門性も神経科学を含んだ基礎心理学領域から臨床、社会、工学を含んだ応用心理学領域まで広範にわたっている。この研究組織は質量ともに本プロジェクトを推進するにふさわしいものであったと評価できる。研究成果から、期間内に研究者間の緊密な連携によりプロジェクトが進められたことが伺える。外部資金の支援も受けた本プロジェクトのための研究設備の整備は十分なものであるとすることができ、研究支援体制も適切に整えられている。			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
研究者養成は必ずしも本プロジェクトの中心的な目的とは位置づけられていないが、期間中に博士研究員PD4名、大学院生RA8名、大学院生98名が本プロジェクトに直接的、間接的に参加している。またそれらの若手研究者にとり有益な研究会、ワークショップ、講演会が数多く開催されている。これらは、大学院教育や若手研究者の養成においても、本プロジェクトが有益な機会になったことを伺わせる。期間中に本プロジェクトに関連して、計15名の博士学位取得者、計39名の修士学位取得者を輩出したことは、それを裏付けるものである。			
3 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
本プロジェクトの期間中、40回の研究会、4回のシンポジウム、6回の講演会、8回のワークショップが開催されている。同規模のプロジェクトと比較しても十分な成果発表の機会が設けられているとすることができ、それらは特に研究者に対して有益な研究情報を提供してきたと評価できる。一方、公開シンポジウムや報道媒体での発表など一般社会への成果公表については必ずしも積極的であったとは言えないが、それは心理学の特質上、安易な発表は誤解を生じやすいという配慮の上での慎重を期したためであるとして理解することができる。			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
本プロジェクトのテーマのうち、(1) ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明については、ポジティブ情動の生理的特徴、情動価を伴う刺激の評価、情動刺激の選択行動、好奇心の神経メカニズムを解明し顕著な成果を上げている。(2) コミュニケーション過程での情動の役割の解明についても、ポジティブ情動と向社会的行動の関連、幼児の共感、ラットの援助行動、社会的文脈における感情経験などについて興味深く重要な成果が得られている。(2) のテーマが目指した、人間のコミュニケーションにおける情動の役割全体の解明には至っていないものの、そのための重要な基礎的知見が得られたものとして評価できる。			
5 その他（選定時「留意事項」への対応状況等）			
選定時の留意事項は該当するものがない。中間評価時の留意事項は、1. 社会貢献、2. 研究プロジェクトの進捗・研究成果、3. 研究者養成であった。上記のように、1. については積極的な社会への成果発表は行われていないが慎重を期したためと理解できる。2. については中間評価時から論文をはじめとする業績が格段に増え十分な成果を上げたと評価できる。3. についても若手研究者に有益な研究や学習の機会を提供したものとして評価できる。			
6 総合所見 (A・B・Cの三段階評価と所見)			
( <b>A</b> ) ・ B ・ C )			
A: 優れた研究成果を上げている B: 研究成果は上がっている C: あまり研究成果が上がっていない			
<所見>			
本プロジェクトは、心理科学において未開の荒野であったポジティブ情動について、その頑健な喚起法の確立や生理的反応特性の解明、情動刺激の評価や選択の特性、動物研究による神経メカニズムの解明など重要な研究知見をもたらした。また、人間同士のコミュニケーションにおける情動の役割について多くの重要な基礎的研究知見を報告した。これらの研究成果は各研究領域を代表する国際誌を含む80本もの論文業績として結実している。これは適切な研究組織運営の下で優れた研究者が緊密な連携により研究を進めた賜物であり、また多くの成果公表の機会を設けることによりプロジェクト内外の研究推進にも大きく貢献したとすることができる。これらを総合し、本プロジェクトは優れた研究成果を上げた			



平成27 (2015) 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価票

2020年3月13日

事後評価委員

選定年度 (研究期間)	2015年度 (2015 ~2019 )	研究代表者	文学研究科 片山順一 教授
研究観点	研究拠点を形成する研究	研究テーマの主体 となる研究組織	応用心理科学研究センター
研究プロジェクト	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦		
<評価> 研究成果概要、自己評価書、ヒアリングをもとに評価を実施。			
1 研究体制	研究プロジェクト遂行のための体制、研究者間の調整・連携の状況、外部資金、研究設備の整備・活用状況、研究支援体制等		
<p>ポジティブ情動に着目した基礎的研究とこれら心理科学の成果を社会に実装化する応用的研究を戦略的に統合する研究基盤形成が達成できたという点に鑑みて、本研究プロジェクトは心理科学の新たな挑戦に向けた研究拠点づくりに成功したと評価できる。基礎心理学の研究現場から教育・臨床ならびに産業界の社会の現場を包摂するインタラクティブな社会連携システムが人的および研究設備面で構築され、数多くの優れた研究と情報が社会に還元されたことなどからも、上記の評価は妥当と考える。幸福に資する安心・安全な社会の形成に貢献する心理科学の新たな挑戦のモデルとして、研究と実践を有機的に統合できた本研究体制の在り方は、今後大いに参考となるに違いない。</p>			
2 研究者養成	大学院学生・PD・RAの活用状況等		
<p>多様な専門家集団から組織された研究体制は、大学院生などの研究教育活動を支援するという成果につながった。本研究プロジェクト期間中に、博士号の学位取得者が15名、修士号の学位取得者が39名にも上った。この数字はまさしく、応用心理科学の研究拠点として、大学院生などの研究の活性化と研究業績の向上に重要な貢献を果たしたことの証明となる。また、本プロジェクトによって採用したRAとPDが、その後国立大学の准教授のポストを得たり、学振の特別研究員 (PD) に採用されていること、海外から博士研究員を受け入れていることなどからも、研究者養成としての役割をじゅうぶん果たしたことがうかがえる。</p>			
3. 社会貢献	シンポジウム・講演会も含めた研究成果の公表状況、地域を中心とした連携・協力体制等		
<p>心理学における古くて新しいテーマである情動の機能と役割の解明を目指した本研究は、学術的のみならず社会的ニーズに応えようとした社会連携プロジェクトとして位置づけられる。その結果、ポジティブ情動に関する数多くの新しい貴重な科学的知見を明らかにしたことのみならず、それらの知見を社会実装化することで、向社会的行動を促す社会共同体の形成につながる示唆を示している。これらの成果はまた、研究業績から明らかのように、国内外の専門雑誌に公刊され、専門の研究者集団において広く共有されるに至っている。さらに、地域に対しても一般の人々にわかりやすく社会還元しており、オープンサイエンスとしての役割も果たせたと評価する。</p>			
4 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等	研究計画の達成状況、これまでの研究成果等		
<p>情動概念を再構築するという学術的問いに向けての挑戦は、心理科学において斬新であり、創造的な取り組みとして位置づけられる。とくに、ポジティブ情動の表出機序と機能を中枢と末梢の神経活動と併せて明らかにできたこと、コミュニケーション過程におけるポジティブ情動の適応的役割をラットや幼児で示すことができたことは、この領域における新しい地平線を切り拓いたと考える。これらの諸点から、本研究プロジェクトは用意周到に準備された研究計画にもとづいて、当初の成果を十分に達成できたと評価できる。惜しむらくは、簡便かつ安全に娯楽性を加味したポジティブ情動を高めるソフトウェアと機器の開発などの成果物に至らなかった点が残念である。</p>			
5 その他 (選定時「留意事項」への対応状況等)	特記すべき事項はなし		
6 総合所見 (A・B・Cの三段階評価と所見)			
(A)	A:優れた研究成果を上げている B:研究成果は上がっている C:あまり研究成果が上がっていない		
<所見>			
<p>私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の趣旨にそって、研究代表者を含む総勢12名の国内外の研究チームが5年間の研究期間の中で、ヒトの心理と行動の中核として位置づけられる情動概念を再構築できたこと、さらにコミュニケーション過程の中でのポジティブ情動の適応的役割を実証できたことなどから、研究と実践のトランスレーショナル研究の数少ないモデルとして、心理学研究の範として位置づけられるに違いない。また研究拠点として、研究者の養成の研究教育支援のシステムや産学官連携の体制づくり、成果を広く社会還元する情報公開のインフラとリタラシー活用の社会連携の在り方などの確立なども、今後の参考となるプロジェクトが達成できたと総合的に評価する。</p>			